

# 求道

第九卷  
第六號

明治四十五年二月十五日第三種郵便物認可  
大正元年十一月二十日發行（毎月一回二十日發行）



求道第九卷第六號目次

求道

◎眞俗二諦の交渉

◎信仰或問

講話

◎『教行信證』信卷三信釋

第二席

◎惡人正機

◎殺されても止められぬ御念佛時しのぶ子

雜錄

◎慧信尼公の夢想ありし佐貫の郷を訪ふの記

近角常觀

每日曜午前九時

求道學舍

〔本郷區森川町一番地〕

毎土曜午後二時

第一求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三求道會

〔日本橋堀込町説教所〕

求道

第九卷第六號

眞俗二諦の交渉

眞俗二諦といふ問題は、頗る簡単に説明することが出来るなれど、眞實に之を了解することは容易ではない、特に誤謬に陥り易き傾向がある。普通世間に言ひ慣れたる説明には、眞諦門とは未來の一大事にして、如何なる逆惡のものと同、如來は救済したまふことである。俗諦門とは、此の如く決定したる已上は、人道を守り、倫常を重んじ、家庭の平和、社會の秩序を來すべきであるといふ。然るに、此種の説明に二個の誤謬がある。第一には眞俗二諦各其範圍が別々になつて考へらるゝ處がある。即ち眞諦門は後生の一大事にして、俗諦門は此世間の道といふやうに考へらるゝ、夫故に兩者が無交渉に終りて仕舞ふ。全體此世に於て、我等が行ひし行爲が即ち未來の結果を來すなれば、實は現世日常の動作が、即ち未來の問題である。然るに俗諦門では、人道を守り倫常を重んぜよと教へつゝ、眞諦門では惡くとも救済せらるゝと教ふる

ときは、慥かに矛盾である。此の如く眞俗二諦同一の範圍、即ち全人生の上に於て云ふときは、たしかに兩者の交渉が起るのである。こゝに於て第二の誤謬を正さねばならぬ。即ち救済の意義が不徹底なることである。救済といふことを、惡しくしても佛より許さるゝといふ様に理解するもの多きは、大なる誤である。我等は決して惡くしてもよき筈がない。即ち俗諦の教ふる如く人道を守り、倫常を重んずべきである。しかるに果して人道が守れるか、倫常が重んぜらるゝか、一も不可能である。然るに、如來は其俗諦の行ひ得ざる者を憫みたまひて、其行ひ得ざるところが可愛想なりとて、慈悲の極りなきことを我等に届けて下さるが、本願の不思議である。しかも其御慈悲が、一往再往て止むべきでない、遂に眞實ならざる私をして、遂には御眞實を知らして下さるまで、眞實を續けて下さるのが眞の救済の意義である。かくの如く、私の罪惡の奥底まで見透して、見捨てぬ如來の御慈悲をいたゞけば、不斷煩惱得涅槃て、雷に罪惡が解くるのみならず、胸中は御慈悲を以て満たされて來るのである。そこで、其御慈悲の力が身にあらはれて實行するのが、眞の俗諦門である。故に俗諦門は、我こそ俗諦門を行ひつゝあると思ふて行ふので



は、なく、一たび罪惡を自覺して御慈悲をいたさたるとき、常に懺悔と感謝との生活が實現するのが俗諦門である。

或人が僧侶として道心を起さねばならぬと考へて、常に道心ならんとするも起らず、方袍圓頂の姿に耻ちて、日夜一家和合せしめんとするも能はず、父母に孝ならず、兄弟に友ならず、如何にせんかと苦しみたる時、法然聖人の選擇本願を述べたまふ所に、發菩提心を擇び捨て、孝養父母を擇びすてたまひしをさして、法藏因位の古、此道心の起らざる、孝養父母の出來ざる、我が根性を見透して、五劫思惟の願を起したまひしかと感泣した人がある。彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、聖人が常に御述懐されたのが、實に此御自督である。

如來は五逆十惡の惡人、五障三從の女人を助けたまふといふことは、何人も承知は爲て居る。しかれども、其五逆十惡の惡人といふが私である、五障三從の女人が自身であるといふことが分らぬ。夫故一般の爲の本願の如く考ふるやうになる。故に言すべりをして自分一人の爲とはいたゞかぬ。恰も

藥の功能書でも讀むやうに承知して居るばかりである。此藥は妙藥にして、如何なる難病と雖即治すといふことは承知して居る。法然聖人の御弟子三百八十餘人、何人と雖選擇集の意味を知らぬものはない、又法然聖人より、直接御教化を蒙りたることなれば、發菩提心の出來ざる、父母孝養の出來ざる、破戒無戒、愚痴無智の輩を、助けたまふ本願といふことを知らぬ人はあるまい。又現に其選擇本願念佛を行じつゝある。即ち其妙藥を服用しつゝあるのである。而も其頂き心地が間違て居る。其様な病人ですら、全治する妙藥なれば、我は未だ夫程までも危篤にはなりて居らぬなれば、必ず効驗があるであらうと、思ふて服用しつゝあるのである。所謂惡人な

ほ往生す、何ぞ況んや善人をやといふ見地である。如何にも惡人を助ける本願なればとて、善を爲してならぬといふことはない。出來るだけは善を爲すべし、戒も持てるなれば、持戒も可なり、發菩提心も可なり、などいふ考である。眞諦門で未來の一大事につきては惡人をたすけたまふなれど、俗諦門では立派に人道を重んじ、倫常を破らざる善人たり得べしと、考へるのが即ち是である。然るに親鸞聖人は、其發菩提心の出來ざるものとは我事也、破戒無戒の徒といふは我身也

といたゞきたまひし也。そくばくの業をもちける親鸞也。此親鸞一人が爲の本願にてまします。功能書を見て妙藥なることを承知して居ること、自分がいよく其病にかゝりたるとき初めて此藥は我爲なり、難病人とは我身也と、自覺したること、は、大なる相違である。如來の本願は惡しきものを救ひたまふべければ、惡をしてもよいといふのは、所謂藥あり毒を好めといふ風情である。であるから惡をなすな、毒を食ふなではない、既に業に惡の極を盡し、毒を食ひつゝある身ではないか。十惡五逆の惡人を助けたまふべければ、まだ惡いことをしてもよいと考へて居るのが、我身が十惡五逆の惡人たるに氣が附かぬのである。惡をしてもよいといふて、邪見に陥りて、惡を爲すのではない、惡を爲してもよいといふのは、猶爲すべき惡の餘地があると思ふからである。既に惡の極を爲しつゝある汝にあらずやとの仰である。難治の病人さへ救かる故に、我身は夫程になさ故に救かると、思ふて居るが大なる誤である。我實に其難治の病人である。難治の三機難治の三病といふのが即ち此愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑しつゝある親鸞のことである。本願醍醐の妙藥は實に濁世の群生、穢惡の庶類たる親鸞自身の爲である。阿闍

世といふは、即親鸞のことである。煩惱を具足せる者と仰せられたのは、即五劫思惟の昔かねてより此親鸞のことを仰せられたのである。他力の悲願はかくの如き我等が爲なりけり偏に親鸞一人が爲なりけり。或人が、發菩提心の起らぬ、孝養父母の出來ざるは、我身の上なることを、今更の如くに驚きたるは、實に此一點である。他人の事ではない、或人の事ではない。實に私自身のことである。實に私自身の爲に起したまひし本願である。私自身の爲に御出世下されし親鸞聖人である。五劫思惟永劫修行の一念一刹那も、皆私自身の爲である。紙衣の九十年、流罪も侮辱も、皆私自身の爲である。彌陀の修行も聖人の御苦勞も、一分一厘も人には遣らぬ、皆私の爲である。思へばくは、恩寵深き我身の上である。併言ひ換へたならば、五劫思惟も九十年の御苦勞も、皆私が悪いばかりに、御心配をかけたのである。若しや私の罪が一分でも少なければ、五劫永劫の御苦勞が減じたであらう。如來不可思議兆載永劫の御修行中、清淨眞實の三業の一念も一刹那も、皆私の不清淨不眞實を見捨てたまはぬ御心ならぬはない。老親白髮の一莖も、皆是私が爲の御苦勞にてまします。世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふことは、人の鬼魅に着せ



られて、狂亂所爲多きが如し。親が狂になつたのは、實に子の可愛さの餘りである。子の爲の親である、衆生の爲の佛である。罪惡深重煩惱熾盛の我等があるばかりに、十劫正覺の方便法身の如來は來現して下さつたのである。南無阿彌陀佛々々々々々々。

惡しくて御助けと、御助けに腰を掛けて、惡しくてもよいと横着に流るゝのは、我身が既に業に罪惡の至極なることを自覺せずして、まだ爲すべき惡がある様に心得て居るからである。業ありとて毒を好まんとする者は、既に毒の全身を犯しつゝあるを氣附かずして、猶毒を好みて食ふべき餘地ある様に思ふて居るのが根本の誤である。毒食ふて皿までといふ横着の起るのは、我既に皿の底まで甜め盡して居る自分たることを知らずして、惡くても救けて下さるからといふて、猶ほまだ惡しきことをする餘地の残りて居るやうに思ふて居る我身知らずである。亦善くせねばならぬと云ふて、我身の惡しきを苦にするは我身の罪惡を自覺したるやうなれども左様ではない、我身の罪惡が何とかして猶善くすべき餘地があるやうに思ふ誤りである。常に云ふが如く、我が身の罪惡を苦にして、之を善くせんと試みるは、修養として貴き

位なれば佛様の御苦勞はない、善くせんと思へども出来ないところが可愛さうであると、其止めんとする惡の止まぬ點、善くせんと欲することの出来ないところを、かねて御承知下されて御見捨のなき御慈悲であることを話したとき、かくまでの御慈悲とはと、あやまりはて、信仰に入り、初めて我身の罪惡を自覺した人がある。かく深く御慈悲をいたゞきた一面は、我身の罪惡の深さを知らされるものゆへに、從來の惡しくてもよいといふ様な横着な考は、露塵程もなくなりて、五體を地に投じてあやまりはつるの外はない。其代り卵の毛羊の毛の先に止る塵程の罪惡業報をもことごとく御見透しありて全く御見捨てなき大悲深重の御慈悲の前には、心にかゝる浮雲もなくなりて、唯々攝取光明の慈懷にをさめらるゝの外はない。實に大悲親様の前には、一分一厘の横着な心は起らず、一點一毫も遠慮の考はなく、地獄必定の我は、慈親最愛の恵みに浴する心持は、何ともかとも言ふべからず、實に私こそは天下の大罪人である。亦天下の幸福者である。我一人のための彌陀佛五劫永劫の御苦勞、釋尊の娑婆往來八千度、六方恒沙の諸佛の證誠、乃至大聖權化の方便引入、畢竟するに、私に此大悲の親心を知さんが爲の善巧攝化にてまします。

ことなれども、信仰の上より云へば、却て我身を善くすることが出来るといふ、高上りをした考である。高慢なる考である。前者の惡しくてもよいと云ふものが、邪見懈怠の徒ならば、猶ほ善く出来ると思ふものは憍慢貢高の徒である。憍慢界とは實に適切なる名稱である。惡くてもよいと腰を掛けるものは、親の汗膏の塊を、湯水の如く心得て居る横着のものである。善くせねばならぬとあせるものは、親の血の涙を他所に見て、自分で遣らうとする遠慮ものである。横着ものは邪見に陥り、遠慮ものは我慢を募る、彌陀佛本願念佛、邪見憍慢惡衆生、信樂受持甚以難、難中之難無過斯と、深く戒めたまひたるも、實に此點である。

而も此惡しくてもよいといふ考と、善くせねばならぬといふ考は、一人の身の上に代るゝ起り来るものである。人が惡しくてもよいと、腰を掛けて横着になりて邪見に陥りて居ると思ひの外、矢張其人の心中には、此様に惡くしては困る、善くせねばならぬと、氣を揉むて居る者が多い。此如き人に對して、惡しくてもよいと腰を掛けてはならぬと戒めても、却てさゝめがない。そして却てそれ程惡しきにも拘はらず、惡くしては困る、善くせねばならぬではない、善く出来る

併若し此超世無上の親心ましますば、たとひ恒沙の諸佛ましますとも何の詮かあらん。我爲には三世十方の中、唯一無二の親様にてまします。十方無碍人の皆歸趣したまへる無碍の一道は、唯此南無阿彌陀佛にてまします。萬徳圓備の嘉號眞如一實の寶海である、南無阿彌陀佛。

十方諸有の衆生は、阿彌陀至徳の御名をさし、眞實信心いたりなは、おほきに所聞を慶喜せん。若不生者のちかひゆへ、信樂まことときいたり、一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ。阿彌陀佛の御名をさし、歡喜讚仰せしむれば、功德の寶を具足して、一念大利無上なり。たとひ大千世界に、みてらん火をもすきゆきて、佛の御名をさきひとは、なかく不退にかなふなり。かくの如く絶對無限の大悲に接して、罪惡の根柢まで融かされて見れば、人世もはや、何等の苦もなし、唯溢れ来るは感謝報恩の經營のみである。如來の御慈悲已外に、猶我等の務むべきものあるときは、夫がために未だ感謝の情は起らぬ。雜修の十三失の中に、佛恩を報ずるの念なしといふのが是である。彼俗諦門を眞諦門已外の範圍に於て、別に務むべきも



の、如く考ふるは、雜修同様に看做すべき俗諦門である。然れども人生全面に於て眞諦門の御慈悲が徹底して見れば、如何なる罪惡も融かされ、如何なる苦惱も救濟せられ、六趣四生の因亡し果滅し、唯大悲の恵みを以て満足せしめらるゝこととなる。こゝに於て信後に於けるすべての我等の行爲は皆感謝の情の顯現である。稱名念佛を初めとして一切世間道に至るまで、皆感謝の情を以て實行する様になる。是即ち眞實の俗諦門である。士農工商皆信仰の基より健全に實行する感謝の經營である。此信たるや家庭に於ては親子夫婦兄弟相信じ精神的に一致するの道となり、臣として君を信じ忠實を盡す臣道となり、政事家には節操となり、婦人には貞節となり、人道もあらはれ、友情もあらはれ、社會の調和、世界の平和、人類の幸福皆此純一無雜の如來廻向の信心よりあらはれ出づる眞實の俗諦門である。



闘主義に陥り易いのである。

○冥想的な信仰は眞實の信仰でない、自分の頭で作りに居るのである、主觀的に假設して居るのである、佛様を有難いと思ふて居るのである。度々言ふことであるが、或人が西有摩山師を訪ふて自己の見解を呈した、曰く、天地宇宙は我と一體であると思ふて居りますと言へば、禪師は言下に思ふて居るだけわると答へられた、他力の信仰にも思ふて居るのが多い。如來様は助けて下さると思ふて居るのが多い、思ふて居るのは苦しいことがあれば碎けて仕舞ふのである、思ふと思はぬの穿鑿ではない、如來様は眞に助けて下さるのである。彼人は親切の人であると思ふて居ると、眞實親切な人であるのとは大なる相違である。其親切に初めて感じ、其御助けを受けたのが眞實の信心である。一たび如來の恵みを感じたならば、苦しければ、苦しだけ益々かはらざる如來の眞實が難有い。たとへば盡ける星ならば日の暮るゝと共に暗澹として其光を失ふも、眞に天に輝く星ならば、世が冥くなればなる程益々光輝を發するのである。思ふて居る信仰なれば隱遁退嬰に陥るなれど、眞の恵をいたゞきたるものなれば世が當てにならぬほど佛の眞實がありがたい、あきらめるの

## 信仰或問

○或問、信仰なるものは熟考ふるに二種類に過ぎざるが如し。一は隱遁的に人生を退きて如何なることがありても之に甘んじて之に任せて安心すること、一は進撃的に飽まで奮闘して如何なる場合にも打勝ち進まんとする事、此二種の何れかを選ぶものに非ざるか何如。

○如何にも信仰の人生に活現する有様としては消極積極の両面あるものなり、然れども眞實の信仰なれば消極も決して隱遁退嬰の意味にあらずして、信仰上安んずべき所ありて動かぬのである、積極も奮闘努力の意味に非ずして信仰上所信の曲く可らざるものあるゆへに如何なる障害をも排しても進むべき力を生ずるのである、併こは眞實の信仰の上にあらはるゝ消極積極である、若し眞實の信仰にあらずして假設的の信仰ならば隱遁的進撃的の二者何れかに傾き易きものである。全體人間の性質が冥想的か實行的かの二者何れかに屬するものである、是即ち所謂定散の二機である、冥想的な主觀的な信仰は即ち定機にして、あきらめ主義隱遁主義に陥り易いのである、實行的な、理想的な信仰は即ち散機にして努力主義奮

てはない、恵によりて生き返へるのである。かくて嘗て冥想的たりし信仰が廻りて眞實の信仰に入りたのである、所謂定散共に廻して寶國に入るのである。

○定機に於て云ふことは亦散機に於ても云ふことが出来る。自分の頭で理想を作りて之を標準として他迄實行せんと企てるのが散善である、廢惡終善をせんと奮闘するのである。しかれども理想は益々高くなるものなるゆへに、益々實行出来ぬ様になる、努力主義は遂に倒るべき運命を有するのである。此に於て益々自己の罪惡深重なること、煩惱具足なることを見出すのである、しかるに佛かねてしらしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた、こゝで初めて此煩惱具足の我を見捨てたまはぬ親心に接したのである、理想が折れて頭を下げて親の御慈悲に攝取されたのである。そこで努力主義を廻へして眞實の信順となつたのである。かく一たび所信が立つた已上は決して曲ぐることも出来ず、退くことも出来ず、そこで所信を確守することが出来るのである。

○佛が助けて下さると思ふて安心して居るのも、自分の思である、佛が難有いと思はんと試みて思へぬと歎くのも矢張自分の思をたのみにするのである。たとへば人ありて直々



親に遇ふて傳言を承り親の眞心を話しに來てくれたとき、之に答へて曰く、我は左様に思ふて居る、かねてより其通り考へて居るといふ返事をしたらば如何、必ずや態々之を言ひに來て呉れたる人は言ふてあろう、そは汝の思にあらずや、想像にあらずや、假定に非ずや、我は親に遇ふて而も汝に眞心を傳へて呉れとの依頼を受けてかく親の眞實を御知らせするに、既によく承知して居るやうな態度を示さるゝならば我が態々來れる所詮なしと、此に於て初めて眞の親の眞心をいたゞきて申譯なかりしと自覺するであらう。是主觀的の信仰を廻はして眞實の信仰に入りたる有様である。又一人あり同じく親より直接の傳言報知をきゝ乍ら、いや我は其様に思ひたいと日夜務めつゝあるのである、せめて朝夕なりとも汝の知らしめて呉れる様に、親を思ひ出したいと努力しつゝあるのである、されども其様に思へぬので困るのであると答へたらば如何、前者の如く折角の報知を既に分つて居る様に思ふも不可なれど現に親の眞心を傳へつゝあるのに、思へぬ、分らぬ、ばかり言ふて自分が親を思へぬことを苦にするも困りたものである、必ず、其人は言ふてあろう、我は汝にかく思へといふのではない、汝は思へぬであらう、分からぬであらう、夫故我は面

生かして置きて、其上に信仰の必要を説きたる方適切なるが如し、何如。

○宗教といへども決して此等を否定するに非ず、然れども生死解脱、救濟苦惱といふ宗教的要義に向ては此等のものは何等の力もないのである。如何に日新の科學であらうが、如何に最新の教育であらうが、生老病死の人生の苦惱を解脱し、生死を超越するといふ問題に向ては何等の効もないのである、其點になれば知識でも、道徳でも、其極に達して突當るのである、此突當る所に佛の救濟が來るのである、其生死の苦海に浮沈するのを憐みたまふが佛の大悲である、學問を學問として其効を認むるが、生死解脱の問題に達すれば突當りて何等の力もないのである、其力なきものを憐みたまふ如來なれば、此處に至れば人生のすべてのものを否定もせねばならぬ、罪惡たることを切言せねばならぬ、迷妄たることを警告せねばならぬ、人間の知識などの何等の力なきことを斷言せねばならぬ、極言すれば他力の救濟は我等が突當る點を憐みたまふのである、我等が突當る點をかねて知ろしめして、呼び掛けたまふが佛の大悲である、特に絶對他力の救濟は何れの行も及び難き點を憐みたまふが選擇本願の本意である、人生

り目撃した儘を傳へ親の眞心を直々言ふて聞かして居る、しかるに徒にかく思ひたい思はねばならぬと努力奮闘して居るのは大なる間違ではないかと諭されるとき、驕然心を廻はして嗚呼今までは親を思はう、佛を思はうと努力しつゝ佛の私をかく迄思ふて下さる御慈悲を知らなかつたと、忽ち親の眞心をいたゞきたならば、是努力主義の信仰を廻へして眞實の信仰に入る有様である、善導大師の二河白道の譬喩の如きは直々如來の方より招喚したまふ有様をたとへられたのである。汝一心正念直來我能護汝衆不畏墮水火二河は如來直々の仰せである而も一僧指授の教西方彌陀の直説である、和讃に曰く善導大師證を請ひ、定散二心をひるかへし、貪瞋二河の譬喩を説き、弘願の信心守護せしむ、南無阿彌陀佛。五濁惡時群生海應信如來如實言といひ、道俗時衆共同心唯可信斯高僧説と何れも直接信心の上より出てたる彌陀の直説である、傳言である、信する外に別の仔細なきなり。

○或問、信仰のことを聞くに初めより人生のすべてのものを否定してかゝる傾向あり、かく云へばとて現代のものの中々承知し難し、或は知識、或は道徳、或は教育、或は實業、夫々人生に有効なればこそ勉むるのである。寧ろ之を否定せず、何ものもたよることの出來ぬ點が如來大悲の起る根本である。

○今生にいかん、いとをし不便と思ふとも存知のごとくたすけがたければ此慈悲始終なしといひ。八萬の法藏を知るといへども後世を知らざるひとを愚者とす、たとひ一文不知の尼入道なりといへども後世を知るを智者とす、といひ、何れも絶對の慈悲の前には我等の力は毫髪も間に合はぬのである、念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん、また地獄に落ちる業にてやはんべるらん總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかさねまらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候とあるが、知識も、學問も、道徳も、修養も全く何等の効もなきことを告白せられたのである。夫故次の文に、そのゆへは自餘の行をはげみて佛になりべかりける身が念佛を申して地獄におちて候はゞこそすかさねたてまつりてといふ後悔も候はめ、何れの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかしと、斷言されたのが我等が何によりても安んずることのなき點を示されたのである。抑々如來の本願は此點を御覽なされたのが大悲の淵源である、實は我等が自身で其効なきことを自覺出來る人間てはない、佛



かねて其邊を憐愍したまふたのが選擇本願である。自力作善の人は備へに他力をたのむ心缺けたるゆへに彌陀の本願にあらず、しかれども自力の心をひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生を遂ぐるなり、煩惱具足のわれらは何れの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて願を起したまふ本意ひとへに悪人成佛のためなれば他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり、よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は仰せられ候ひきと、實に此大悲に遇ひて我等は如來に御心配を掛けし悪人たることを自覺するのである。

○法然聖人が選擇集に發菩提心の出來ぬ戒定慧の起らぬ、六度の行の行せられぬ、孝養父母奉事師長の出來ぬものを助けたまふ選擇本願なりと仰せられたが、他の弟子方は、勿論かくの如きものすら助かるのであるから、此等の行の出來るものは勿論助かる、其様な危篤の病人すら此藥で助かるなれば、病の輕き我等は勿論助かると考へたのである、即ち悪人なほ往生す況んや善人をやといふ考へ方である、しかるに親鸞聖人は此の行の出來ぬものといふのが即ち親鸞自身のことである、危篤の病人といふのが親鸞のことである。若し外の

行が出来るものならば何ぞ選擇本願を立てたまふことあらん、若し外の藥で間に合ふものなれば、特別の妙藥はいらぬのである、善人なほもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや、危篤の病人を助けるのが妙藥の功能である、また外の藥が間に合ふ様に思ふて居るのが抑々我身知らずである、我等の助かるのは純一無雜大悲の恵ばかりで助かるのである、我等の智慧や學問が生死解脱の爲に間に合ふ様に思ふて居るのは我身知らずである、專修念佛たゞ念佛ばかりといふ點が、他の學問や修行の効を認めぬ點である、救濟の前には人生の何物も其益にたゝぬのである、隨て實に深酷なる罪惡觀が起り來るのである、會無一善、極惡最下の親鸞なりとのたまふのである、是が在家宗たる眞宗が出來た所以である。

○かくの如く深く罪惡觀を起されは親鸞聖人がエライからであると聖人を尊崇することは聖人は大に迷惑に感ぜらるゝ、何んとなれば聖人を賞びたる結果は、聖人の信ぜられた佛の恵みを眺めぬといふことになる。勿論かくの如く自力の無効を認めるまで、即ち突當るまで理想を高めて實行されたのがエライとも言はれやう併結局其無効を認められたのであるから前車の覆へるは後車の戒、自力無効に終りたのであるからエ

ライのではない、夫よりは寧ろ之をかねてしろしめして選擇本願を立てたまひて我等のために正覺を成じたまひし親様の御慈悲を頂いて下されて、其頂かれた儘を知らして下されたればこそ、我等何れの行も及び難きものが同様に御慈悲をいたゞくことが出来るのである、聖人は自ら懺悔して無慚無愧のこの身じや、小慈小悲もなき身じや、この身を見捨てたまはぬ如來の願船じや如來の廻向じや、同様に此親様の御慈悲ばかりより外にないと知らして下さつたのが親鸞聖人の純一無雜の信である。

○併かくの如く一たび如來の慈光に接して見れば、此信仰の一よりあらゆる人生の力があらはれ出づるのである、信仰に入るには人生のすべてのものが無効である、さればこそ佛も憐みたまひ、又其救を受くるのである、されど一たび其恵みに攝取せられて見れば、嘗て否定したる人生のすべてが立場を異にして人生に復活してくる、學問はますゝ如來の大悲の深さを知る學問となり、其信仰を基とする嚴格なる道德が起り、其信念を基礎とする政治、實業皆起り來るのである、所謂資生產業皆實相とても云ふべき様に、其信仰の一によりて社會の可れの部分にも活躍出来るのである。

○人生のあらゆるものを活かして置きては信仰には入れぬ、すべてを否定し、何れも無効であるゆへに唯一救濟の恵を受くことが出来るのである、一たび信仰に入ればかつて否定したすべてのものが信仰界中の力として再び積極的に皆活き返りて來るのである、諸の雜行雜終自力の心をふりすて、一心に阿彌陀佛の御慈悲ばかりで安心したもののゆへ、信後の行為皆盡く佛恩報謝の經營としてあらはれ來るのである、是即ち徹底したる眞諦より自然に眞面目なる俗諦門の流れ出づる所以である。

一 よきことをしたるが、わるきことあり、わるき事をしたるが、よき事あり、よき事をして、われは法華に付て、よき事をしたると思ひ、われと云事あれば、わるきなり。あしき事をして、心中をひるがへし、本願に歸するはわるき事をしたるがよき道理なる由仰せられ候。しかれば蓮如上人はまいらせ心がわるきと仰られ候と云云。

一 萬事に付て、よき事を思ひ付るは御恩なり。惡事に思ひ付たるは御恩なり。捨るも取も、何れも御恩なりと云ふ。(蓮如上人御一代問書)



# 教行信證「信卷」三心釋

（夏季求道會講話）

近角常觀

## 第一席

昨日は本年夏季求道會の第一日として、初めに善導大師の御文により、機法二種深信の味ひをば喜ばせて貰うた事でありました。今日は續いて親鸞聖人の三心釋の御自釋の文にかゝる筈でありますけれども、一言昨日の最後の止め言葉が不充份でありました故其處をも一度申し度いと思ひます。

昨日拜讀した畢りの方の『往生要集』の御文に

『我も亦彼の攝取の中に在り、煩惱眼を障つて見たてまつること能はずと雖、大悲倦きこと無くして、常に我が身を照したまふ』

こは昨日も申す如く、中村氏の御病中に、私が始終行きてお話ししたのが之れでありました。斯くあなたも光明中に看護を受け、光明中に養生をして貰ひなされる。之れが皆な佛のお光明中にさせて頂くのにて、煩惱眼を障つて此方を見奉る事が出来ぬのであるけれども、遣る瀬無きお慈悲を頂き見れば

を能く頂かなくてはならぬのであります。

### 二

茲はごく肝腎の處でありまして、御承知の如く『觀經』には光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨。

とあります。念佛衆生攝取不捨とは、其の如何にも遣る瀬無く思召す佛のお慈悲を承はる一念に、其の佛のお心の届いて下された心持が、即ち南無阿彌陀佛の衆生であります。『歎異鈔』の一章には又

彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛をまうさんとおもひたつて、このおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

即ち、茲にも念佛といふ事があります。之は前にも申した事でありますが、會つて或人が

十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけけたてまつる。

の『和讃』を見て、何うも此の「念佛の衆生をみそなはし」の一句が、こだわつて困ると申された。何うも此の和讃を頂くと、念佛を稱へなければ助からぬやうな心持になり、念佛の二字が邪魔になりて困る」と話されました。其處で私が「然らば罪惡の衆生とあるとよいのでせう」と申しますと、「然うあれば如何にも宜しい、罪惡の衆生とあれば、何も言ふ事は無く非常に有り難いのであるが」と申された事があります。成る

大悲の方よりは常に飽き足り無く此方を照らして下さるのである」と申して居つた事でありました。斯く佛の廣大なる慈悲の上より申すと、私共罪の深き、當てにならぬ有様を、佛は兼ねてよく知つて下されて、何時生命畢らうとも、私をば決してお見捨て無き廣大のお慈悲を以て、常に照らし詰めに仕て居て下さるのであります。が茲の處で一言、其の佛の廣大のお慈悲で照らし詰めに仕て居て下さるのであるが、彌々廣大なる攝取不捨の光明中に納められるのは、其の遣る瀬無きお慈悲の届きて下された一念に、納めて頂くのである。との事を茲は、初めに氣を就けて、申し度いのであります。佛の廣大なる遣る瀬無きお心は、いつ如何なる時でもお見捨て無き廣大のお慈悲には違はぬのでありますけれども、我々が彌々其の攝取の光明中に納められるのは、其の遣る瀬無きお心の、我々の胸に届いて下された一念の時である。一念に親様のお心の届いて下された時が、攝取不捨の光明中に入らせて貰ふた時なのであります。佛の思召では、十方の罪深き者、一人も遣さず悉く救はにや措かぬ、との其の遣る瀬無きお心でありませぬけれども、其のお心が此方の心に届く迄は、大悲の心を惱まし下される。親が子供の事を心配する場合でも、親の心が届かぬ間は、何うか此の心を知らせ度いの、親の心配は止まぬ。彌々其の親の心が届いた一念に、親は斯く迄思ふ我が心が届いたかと、其の一念に大満足して、あゝよく聞いて呉れたと大喜びをして下さるのである。其のお喜び下さる一念が、攝取不捨の光明中なのである。攝取不捨の光明中に納めらるゝといふ味ひは、茲に在るのであります。茲

程佛の御手許では、罪惡の者を助けるとの廣大の思召なのであるけれども、其の遣る瀬無き思召は、我々が彌々眞に其の親心を聞かして貰うた一念に、夫れが私の胸に届いて下さるのであつて、其の一念は「あゝ有難や南無阿彌陀佛」と、眞實親のお心が貫徹して、念佛申さんと思ひ立つ心が起る、其の一念の時に攝取不捨の御利益には預るるのである。其の遣る瀬無きお心の届いて下された一念が、念佛の衆生なのであります。夫れを我々念佛のお慈悲を頂く方は第二にして、念佛を稱へなければならぬと思ふ故、念佛が邪魔になりて困るやうな事になる。すれば我々「彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて往生をとぐべしと信じて」とあるのだから、信ずる外に無い事となるのであります。佛が此の罪深き私を助けんが爲めに、此の私が頂けるやうに、此の私に届くやうにと思召す、其の慈悲の思召の届いて下さる時が、南無阿彌陀佛の念佛の顯はるゝ時にて、其の一念が攝取不捨の御利益を蒙るの時となるのであります。

### 三

こは法然聖人の選擇集中にも、特に力を入れ示し下されてあつて、先づ彌陀の光明は餘行者を照さず、唯念佛の行者を攝取するの文。

と頌を改め、今の『觀經』の御文が引かれてあります。こは實に水際立てた御教化にて、「阿彌陀佛の光明は、餘の者を救はぬ、唯念佛の者を助けて下さる御光明である」との御示して



あります。何うかといふに、他の行でも救はれると言ふのは、即ち自力でも行かれるとの事である、處が他の行では往けぬ者を助けるとの廣大の大悲が、彌陀の本願念佛の教へなれば、此の餘の道では逆も助らぬ私をとの、遣る瀬無き思召にてまします、と頂けば、あゝ有難や南無阿彌陀佛と頂く外なくなつて來るのである。攝取不捨とは、此のお心を頂いた者を捨てぬとの慈悲であるとの示してあります。

之を世の事に譬へて申すに、我々、人にあゝも斯うも種々好意を寄せても、人が夫れを受けて呉れぬ。一方は好意を持つ事は少しも變らねども、夫れを人に届くる迄は、何うしても満足では無いのであります。其の如く佛は我々の爲め、五劫の思惟永劫の御苦勞を爲し下され、十劫以來變り無く我々に向ふて下さるのであるも、我々の方で、自分の罪が深いとも知らず、又其の如き遣る瀬無き佛ましますとも知らずに居る間は、佛は常に心を痛め下されて、満足して下さる事は無いのである。然らば満足出來ぬから、其の者を捨て、仕舞はれるのかと言ふに、否、何うかして飽迄満足させねば措かぬとの心を以て、彌々此の者に向ふて下さるのであります。斯く遣る瀬無き心を持ち、私を哀れみ待ち兼ねて居て下さるといふ此の親の大悲を聞かせて貰うた一念には、「あゝ、長々此の私の爲めに、夫程の御心配を懸け奉つたのであつたか、申譯が無つた」と頂くより外は無。其の頂けた一念に大悲の親も、「あゝとうど頂いて呉れたか」と深く喜び下され、抑佛が本願をお起し下された時の御本意が、初めて之れにて満足するのである。『西方指南鈔』の中には之をお示し下

されて「衆生往生の定まる時に、彌陀の本願初めて満足する」との意味を書かれてあります。私共の胸に、彌々頂ける迄は、大悲の方ではいつ迄も御満足下さるといふ事は無い。が彌々夫れが届いた一念に、「あゝ有難い」と我々の頂けた時、大悲の佛は初めて深く喜び下され、光明中に其の者を納め取つて下さるのである。之が攝取不捨の御光明なのであります。又其の頂いた一念は、南無阿彌陀佛なのであります。之が決して言葉にあらず、姿にあらず、深重の大悲が、此方に眞に届いて下さるから、有難いのである。其の有難いのが、即ち聲に現はれて南無阿彌陀佛である。而して其の一念に、攝取不捨である。故に「彌陀の光明は餘行の者を照さず、唯念佛の行者を攝取する」なのであります。

#### 四

猶ほ、一つ加へる事があります。夫れは一般に此のお慈悲を聴聞し、誰も中どころ迄は分つて居るのであります。我々を助けて下さる、といふ事は誰も分つて居り、一應自分が悪いとは、皆な思つて居るのである。佛はお慈悲のお方で、有難いとも、皆な思つて居るのである。去りながら、彌々徹底して心中一點の不安無く、大悲の本願は眞に自分一人の爲めと彌陀の五劫永劫の御苦勞を、實に此の我が一人の上に受くる事が、六かしいのであります。此信心の上の有難いと申すのは、唯一應有難いといふやうの事に非ず、我々が此のお慈悲を頂いて安心が出來るといふものは、「こはひと事て無し、實に此の私一人の爲めに、斯く迄苦勞して下された此の親様

南無阿彌陀佛が在しませばこそ」と、此の親のお慈悲に腹一杯満足してこそ、此の罪の深い淺間しき私が、何等の不安も無く安心させて頂く事が出來るのであります。すれば此の遣る瀬無き心は何うしたならば頂けるか。頂きやうに上手下手があるのでは無い。要するに、此方が頂く方に皆んなが熱心になり、頂く手前に力を入れるから頂けぬのである。頂けるは親のお慈悲の如何にも御親切なる處を聞かせて貰ふから、頂けるのである、聞かされて見れば、如何にも廣大の御哀れみに今更びつくりして、今迄彼是れ申して居つた事の、如何にも申澤無いとなるのであります。

#### 五

其處で常に申す娑捨山の話が、實に有難いのであります。此の話は、若し私が法を説く事ありとすれば、小供の時父に此の話を書いて貰ひて、形式なれども話したのが、私の法を説く初めてありました。……話は不孝な小供が、年老ひた自分の親を、籠に入れて奥山に捨てに行つたといふのであります。捨てに行く道すがら、親は籠の中より瘦せ衰へた手を出し、道のべの木を撓め、草を折りて、道しるべをする。小供は之を「親があんな事するのは、年老ひてもまだ歸つて來る氣と見える」と思ひ、勿論心中では親を捨てるのは善く無いと思ふて居ながらも、其のあとから、其の道しるべを碎き、殊更廻はり道して捨てに行つた、との話であります。普通の説話に過ぎぬのでありますも、信仰上特に有り難いと思ふ故、之を信心の味ひに比較して、話して見よう

と思ひます。

親を捨てるのは善く無い、とは誰も心には知つて居るのであります。私共親を一人故郷に置き、遠く出て居るのは善く無いとは心には知つて居るのである。善く無いと知るならば、即ち今直ぐ國に歸るなり、何んとかはつきり句切りをつくる事を爲るかと言ふに、夫れをせぬ。私に何と思ふて居るかといふに、「善く無い事は善くなけれども、東京に居れば人にお慈悲の話をする事が出來るし、又親は決して自分を不足に思ふて居て呉れぬ、不満足には思ふて下さらぬ、其處が實に親だ」と、自分の悪い事は凡て棚にあげて置き、其處が親だ」と、恰も此方は不孝をしても黙つて優さしくして下されるのが親のやうに思ひなし、「此方は捨てに行くのである、親は黙つて捨てられて下さる、夫れだから捨てに行くのは善く無いけれども、こらえて貰つて捨てに行かう、捨てられても小供の言ふまゝに、黙つて下さる處が、實に親の有難い處である」などと、凡ての人が皆な之れなのであります。夫れだから口には悪い、と言ひながらも、心の中では「黙つて自分のするまゝに捨てられて下さるのが有り難い」といふやうの事になる。故に今申した攝取不捨のお恵みでも、「我々は悪い者であるけれども、佛は皆な光明中に入れて置いて下さるの故、自分は悪いけれども、光明中に置いて貰ふ身である」といふやうの事になり、自分は悪いと本當に思ふかと思ふと、直ぐ裏の方で「悪くてもよいのだ」といふやうの考を起す事になる。然らなると、「自分ながらも之ではあやしい。此の状態は、或はお慈悲に慣れて居るのかも知れぬ。すれば



もつと我が身の悪しきを思ひ度い」などと、皆ならん思ふに決つてゐるのであります。處が之れが然うで無く、皆んなが此の状態を、お慈悲に飽き足つて居るのであると思ふのであります。之は飽き足つて居るので何ても無い。實はまた頂き方が足りぬからなのである。親のお慈悲は飽き足つて居るの居ぬの、段で無く、そんな小供に菓子遣らうといふやうな小さな慈悲では無いのであります。

六

其處で何かと申しますに、今の話に戻りて、斯く「濟まぬ」と思ひながらも、遂に山の畔に達して、親を捨て、仕舞うた、さてあと振り、今や歸らんとする其の時に、親が袖を控かえて、「お前一寸待て」と言はれた。お前は彌々自分と別れて歸る積りか。お前に篤くと言つて置き度いことがある。それは外の事では無い、お前が自分を捨て、歸るのを、我は不満におもふなどといふやうの問題ぢや無い。お前は自分を捨て、歸つて行くのであるが、捨てられて死んで行く自分、お前の行く先きが氣に懸る。て我はお前に別れて茲で死ぬるが、お前は、お前の身の振り向きに、能く氣を附けよ、兼ねて言ひ措いた通りに、屹度能く實行してゆけ。實は今茲に來る道すがら、道々道しるべを仕て置いたが、あれはお前が歸り道の間違はぬやうの爲めぢや。て其の道しるべを辿つて、間違はぬやうに歸れ、歸り道を間違へて、踏みはずしをするな」と、斯く親より一言いはれた時には、今迄親を捨て、捨てられても黙つて居て下さるが親の慈悲ぢや」位の事

のせらるゝ道しるべを、あれは自分の爲めだらう位に思ひあとよりくゞだきて來た事の如何にも口惜しさ、身を地に投げて懺悔するより外無いのである。茲の處には世の常ならぬ、飛び越える處があるのである。之れでなけりや、此の不思議は分らせて貰へぬのであります。

七

昨日告白の時に、言はんとしたのも茲であります。話が餘り適切にて、少しく言ひ過ぎるやうであります。思ふた通りに言はせてもらひませう。昨日も申した如く、今度石見の中村さんといふ方が亡くなりました。其の亡くなるゝ時自分は充分死ぬ覺悟して、妻子の方の行く先きを思はるゝ御様子に、之がよく現はれて居るのであります。自分は既に立派に覺悟がつきてある。去りながら子供の入學試験の邪魔にならぬやうに、成る可くは呼び寄せぬやうに仕度いとあつた中村氏の御心、又側から無理に呼び寄せて、彌々御息が試験の爲め別れて行かる事となつた時には、瀕死の疾苦中より自ら筆を執つて、其の學校の先生に、子供の將來を宜しく頼むと手紙を書かれた。而して今死んで行く自分の事につきては、全く佛にお任せして更に不安がなく、其の安心の上より、唯子供や一族の事を思はれたのである。之れが人間の凡情の上より、思はれるので無い、若し之れがお慈悲を頂かせて貰ふて居るので無ければ、茲で雙方とも唯迷情の上より、先きの事を心配し合ふのみの事となる。處が既に自分の生死さへも佛に托されて居られるのである。況んや妻子の事も慈

ては無い。親のお心は

假令身を諸の苦毒中に止むるも、我が行精進にして、忍んで終に悔むじ。(大經)

親は初めより身を捨つる位、事は何んでも無いが、夫れにつけて汝の行く先きが氣にかゝる、捨てられぬ。道すがら道しるべを仕て置いてやつたから、夫れを辿つて間違はず歸れ。といはれた茲であります。我々いくら自分から機の深信を頂かうと思ふたつて、自分で力んで深信が強くなるものでは無いが、斯く親の方より私の、如何にも悪しき根性の底の底迄知り援きて、其の者が捨てられぬと言つて下さる眞の御まこととを聞かされた其の時には、「あゝ實に夫れ程迄の仰せなりしか」と、茲の處で届いて下さるのであります。若し世間の「善い事を仕た者は善くなり、悪しき者は悪しくなる」といふ之れならなく、當り前の事でありませう、其の悪い事を苦にする、止められぬ、其者が可哀想とある廣大のお心。如何な親捨ての不孝な私も、此の親の最後の言葉を聞く時には、「親を捨てゝも黙つてゝ下さるのが親だな」といふのに、事にあらず、自分の身は捨てられても、自分の事は打ち忘れ、其子の行き先きが氣に懸ると、道しるべを仕て下さるが親のお心故此のお心を聞かせて貰うた時には、實に有難いと、……否初めて此のお心を承つた時には、有難い位の事にはあらず。無邊の聖徳識心に攪入す。(行卷)

とありて「何たる廣大の御哀れみ」かと、頂く外無いのであります。翻つて自分を見るに、自分は今の今迄、其の親を捨ててに茲迄出て來たものである。否捨てて來た段ぢや無い、親悲の上より何一つ思ひ措く事は無いのであるが、其の安心の上より此の度びは「何うかして將來踏みちかへずやらせ度い」の思ひが絶えぬのであります。猶ほもう一つ申せば、大分此の話は強くなるのでありますけれども、始終自分はお慈悲の上より何時死ぬてもよいのであるけれども、其の安心の上より少し生き度いゝの心が起る。夫れを側より見て、お慈悲頂いた上でもまだ此の思ひがあるか、と思ふのでありますけれども、若し其の「生き度い」が、自分の生命が惜しくて生き度いので無く、皆んなにお慈悲届け度い爲めに生き度いならば、よく分るのであります。

八

さて上來申述るが如く、夫れ程の廣大の御親心を聞かされて見れば、親が歸る爲めの道しるべとのみ思ふて居た處に思ひがけ無くも自分の爲めに仕といつて下された道しるべであつた。此の一念には、唯吾が身の申譯無さ、親のお慈悲の遣る瀬無さに感激廻心するばかりであります。

其處で抑阿彌陀佛の五劫永劫の御苦勞と申すが何であるか。人は眞宗の佛は、五劫永劫の御苦勞の人格的の佛であるなど、無難作に言つて居るのであります。其の五劫永劫が一體誰れの爲めの五劫永劫であるか。唯此の私を助け度い爲めばかりに、此の親様の五劫永劫は現はれ出て下されたのであります。親戀聖人は「正信偈」の初めに

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在しまして、諸佛淨土



の因、國土人民の善惡を視見して、無上殊勝の願を建立し、稀有の大弘誓を起發せり。五劫に之を思惟して攝受したまふ。重ねて誓ふらくば名聲十方に聞こえん。と仰せ下されて、阿彌陀佛なる親様の起りは、此の法藏菩薩の發願の生起本末より來ると申すより外に申しやうは無い。此の抑の親心の親心たる處を頂かねば、眞宗のうま味は無いのであります。

抑々十方の諸佛實に數多く居らせらるゝ事であるが、今阿彌陀佛は其中より何故特に現はれ出て下されたのであるか。何うしても普通の佛の法では、助からぬ私なれば、其の私を助け度い爲めばかりに姿を現はし、五劫永劫の御苦勞をば爲し下されたのである。故に十劫正覺のお姿まる／＼が、此の私が罪深く、逆も助からぬ者なればこそ、現はれ下されたお姿、とより外に申しやうが無いのである。聖人の『和讃』には無明の暗夜をあはれみ、法身の光輪さほもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する。

斯く、現はれて下されし佛のお姿は、實に我々の無明がもと罪深きがもとなのである。夫れが可哀想故、夫れを助けんの御心一つより來り下されたのであります。故に眞に之れが頂けたのなら、佛が助けて下さるから、悪しくてもよいのだ位の事では無い。實に其の惡しき處が、大悲の涙の源なのである。惡しきが爲めに、此の者を哀れと思召し「飽く迄其の者を我が境に至らしめずば措かぬ」の、五劫永劫の御苦勞の結果から、其の御救ひは出て來つたのである。此の遣る瀬無きお心が、即ち佛の本願、夫れを信じた處が、即ち南無阿彌陀

佛となるのであります。

九

其處で前序の最後に申した、『爾れば若しは行、若しは信、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまふ所に非ること有ること無し。因無くして他の因有るには非るなりと知る可し』。

が茲で出て來るのであります。我々が頂く處の念佛も、夫れを其の儘頂いた信心も、一つとして阿彌陀佛の清淨願心の此の御親心がもとなりて、夫れよりの下されもので無いものは無い。眞宗の本意は、唯此の私に向ふて下さる、遣る瀬無き大悲の親心一つなのであります。此の遣る瀬無き大悲の親心を、彌々眞に承はり「今迄の道しるべは、凡て皆な汝の爲めに仕て置いたのだぞ」との一言を聞かされた一念には、何人も「あゝ有難や南無阿彌陀佛」の思ひが起らざるを得ぬ。此の有難いと謝り果てた一念に、南無阿彌陀佛と思はず口に出して下さる念佛も、信心も、皆な一つとして自分の力て出來たといふものは無い。皆な此の阿彌陀佛の遣る瀬無き清淨願心から、向ふ様に於てちやんと廻向成就して、私に下されようと待つて、下さるのである。長々の五劫永劫の御苦勞の結果で、向ふ様に於て凡て成就して私に與へようとして下さる、此の遣る瀬無き御廻向一つで頂かせて貰はれるのであります。

猶ほ茲の處で「因無くして他の因有るには非る也」此のお言葉に就て言はねばならぬ。上來申すが如くて、此の廣大の阿彌陀佛が現はれ下され、我々を助けるとの大悲の本願が非らず他因にあらず、眞に佛より「汝の爲めに斯く仕て置いたのであるぞ」と、此の眞の親心を知らされた時には「あゝ有難い」と、此の一念には此の如來清淨願心の御親心を頂くのである。之れが眞實の正因なのであります。『和讃』には宜しく

至心信樂欲生と、

十方諸有をすゝめてぞ、

不思議の誓願あらはして、眞實報土の因とする。

斯く明らかに如來廻向の御親心を知らされて見れば「あゝ夫程迄に親は私の心を知り抜いて、夫れが可哀相と言つて居て下されたのであつたか、之はしたり／＼」と明らかに私の心に佛のお心の届いて下されたが、如來御廻向の御まこと心を頂いたのである、之が即ち眞因である。此の一念には、南無阿彌陀佛々々が空に出づるに非ず「明かに斯く迄哀れみ給はる大悲の佛が在し／＼」て、此の私の爲めに久遠劫來御心配下されてあつたのであるか、「和讃」に

超日月光この身には、

念佛三昧をしへしむ、

十方の如來は衆生を、

一子のごとく憐念す。

子の母を思ふごとくにて、

衆生佛を憶すれば、

現前當來とをからず、

如來を拜見うだかはず。

と此の一念に我々の罪の深きことを謝り果る。機法二種深心の機の深信が茲に到りて初めて分り「あゝ有難や、眞に我々は永劫に仕て見ようの無いものでうりました」と、之を「自身は是れ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして云々」と言はんか、又「彌陀の本弘誓願は、名號を稱すること下至十聲一

まします事が、實に我々の助かる因である。處が、之を「我々の方では何もせいでも、佛の廣大の因で助かるんだ」といふ時は、自然外道に陥入り、他因となる。又「放つて置いても、ひとりて助けて下さるのだ」となる時は、無因の間違ひに陥入つて仕舞ふのである。此の「因無くして他の因有るには非る也」の一語、間違ふと無因になり他因になり易いのであります。此の頃は淨土門他力主義などいふ言葉を、時々新聞などで見る事である。一體に他力淨土門などいふ言葉が、世間一般に使はれるやうになつたのであります。がこは一面他力の行はるゝ時機到りたと見る時は、喜ぶ可き事ではありますけれども、其の使ひ方が凡て間違つて居る。自分は何もせいでも、人が善くして呉れるのだ」といふ意味でいふ他力ならば、夫れは他力では無く他因である。又捨て置いても自然に助るのだ」となる時は、無因となるのであります。こは印度の自然外道などに、「人生には善惡の因果無し」と言ふて、無因を主張するのがある。又「我が方に因があるので無い、他の因でひとりて助るのだ」と、他因を説くのが梵天外道などの類であります。處が之れが印度に在るばかりで無い、日本にもある。眞宗の教へを聞きながら、唯口でばかり有り難いと言ひ、其の肝腎の遣る瀬無き佛の願力を見ずに、唯有り難い／＼と言つて居るのは、即ち無因である。又我々は「惡しき方は、氣樂に通る過ぎて居る類は、即ち此の他因なのであります。

處が今眞に此の遣る瀬無き佛の親心を頂く一念は、無因に



聲等に及ぶまで云々」と言はんか、唯聲に出して南無阿彌陀佛々々と喜ぶより、他に仕様が無いのであります。

十

さて之より次ぎの本文に移りて

問。如來本願已發至心信樂欲生誓、何以故論主言一心也。答。愚鈍衆生解了爲令易、彌陀如來雖發三心、涅槃眞因唯以信心、是故論主合三爲一歟。私闕三心字訓、三即合一、其意何者、言至心者、至者即是眞也實也誠也。心者即是種也實也。言信樂者、信者即是眞也實也誠也。滿也極也成也用也重也審也驗也宣也忠也。樂者即是欲也願也愛也悅也歡也喜也賀也慶也。言欲生者、即是願也樂也覺也知也。生者即是成也。作也爲也興也。明知。至心即是眞實誠種之心。故疑蓋無雜也。信樂即是眞實誠滿之心。極成用重之心。審驗宣忠之心。欲願愛悅之心。歡喜賀慶之心。故疑蓋無雜也。欲生即是願樂覺知之心。成作爲興之心。大悲廻向之心。故疑蓋無雜也。今按三心字訓、眞實心而虛假無雜。正直心而邪偽無雜。眞知疑蓋無間雜故、是名信樂。信

十一

をこて先づ斯く問ひをお起し下されて、次に

『答ふ。愚鈍の衆生解了し易らしめんが爲に、阿彌陀如來三心を發したまふと雖、涅槃の眞因は唯信心を以てす。是故に論主三を合して一と爲せる歟』

之れは何うかといふに、斯く佛は至心信樂欲生の三心と、事分けてお説き下されてあるのであるも、夫をば天親菩薩は愚鈍の衆生頂き易いやうに、唯一心であるとお示し下されたのである。故に至心信樂欲生の三心が、佛の本願には在るに違はぬも、之を頂く段になりては、此の三心を別々に姿に顯はし頂くのでは無い。眞のみ親の遣る瀬無き慈悲を聞かされて、「あゝ有難い」と夫れが心に徹到した其一念に頂くのなれば、唯一邊に頂くのである。阿彌陀佛が三心とお誓ひ下されしも此の三心は何もこは至心、こは信樂と一々事分けて頂くので無い、遣る瀬無き大悲を聽聞し、「あゝ有難い」の一心に頂くのなれば、即ち『涅槃の眞因は唯信心を以てす』である。即ち佛の遣る瀬無き、至心信樂欲生の廣大の大悲を私に與へて下さる、夫れを頂きた處は唯信心の一つにて、其の信心一つが涅槃の眞因なのである。頂くは其の佛の廣大の親心を、「あゝ有難い」と夫れを頂くばかりなの故、『唯信心を以てす、是の故に……一と爲せる歟』と仰せ下されたのであります。て昨夜談話會でも、皆様が唯「信心を得度い」と言はるゝ故、私は申したのであります。佛のお慈悲は此方から信じようと心に向けるから頂けぬ。此方から頂かうとかゝりて

樂即是一心也。一心即是眞實信心。是故論主建言一心也。應知。

今日の處は頗る趣きが變つて居るので、何ういふ事かと皆んなが不審の立つ所であります。

十一

先づ初めに

『問ふ。如來の本願已に至心信樂欲生の誓を發したまへり。何を以ての故に論主一心と言ふや』

と。私など初め左程にも思ふて居無つたのでありますも、近頃かゝるお言葉頂くのと、如何にも親鸞聖人の御信心の嚴そかなるに感ずるのであります。先づ初めに「論主」と仰せられしは天親菩薩の事にて、御存知の如く天親菩薩は印度に現はれて

世尊我一心に盡十方無碍光如來に歸命したてまつり、安樂國に生れんと願す。

とお示し下されたの故、如何にも仰せが難有く、能く分かるのであるも、而も阿彌陀如來の本願には、既に至心信樂欲生の三心と、御誓ひ置き下されたのである。夫をば何を以てか天親菩薩は、斯く一心とお示し下されたのであるか。と云ふのが此の尋ねの主意であります。既に斯く此の御尋ねの言葉の上にも「如來の本願已に至心信樂欲生の誓ひを發し給へり」と、もう此の御一言で、はや大悲の親様が我々の上にお向ひ下されてある事が能く頂かれるのであります。

頂ける信心に非ず、此方は今日迄間違ひだらけの身なのである。其の間違ひだらけの私に、夫れ程迄にお親切に向つて下さる、其のお心を聞く時は、之を頂かすには居られぬては無いか」と、申した事でありませぬ。既に御存知の如く、御文の上にも自然即時入必定と仰せられ水が低きにつく如く、向うが「何うしても救はねば措かぬ」との廣大のお力て押し寄せて下さるもの故、自然に此方は落ち無くてはあらぬのである。て我々は常に瀧を下からばかり見て居るもの故いかぬ。下からばかり見る時は、上の御力が分らぬもの故、たゞ偉大なる光景に驚くばかりの事となる。處が遣る瀬無き上方の御力に眼を止めて、お慈悲と共に落ちる時は、即ち自然即時入必定。飢えたる者の食を取るが如く、我々罪の深い、仕様の無い夫れが可哀想て見て居られぬのぢやとの御親切を承はるなり「あゝ有難い」と頂かせて貰ふより、外無くなるのであります。すると今迄の如く、人があゝいふ風に喜ぶから、自分もあゝいふ風になり度いも何も無くなつて仕舞ふ。皆んなは人があゝの如く喜ばれるから、自分もあゝの如く頂き度いと、瀧を下からばかり眺め、羨んで居るからいかぬ、瀧に乗りて此方も共に落ちさせて貰ふのである。當り前なら、我々は水中に没すべき罪の身なれども、其の者が見捨てられぬの廣大のお慈悲の爲めに、如何な罪重き身も浮かばせて貰へる。浮く故流に乗つて、落ちさせて貰ふ事が出来るのである。『行卷』には宣はく、

大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜に、衆禍の波轉ず。即ち無明の闇を破り、速に無量光明



士に到て、大涅槃を證し普賢の徳に遵ふなり。  
と。まことに難有き御言葉であります。

十三

さて之からあとの處は一風變はつて居る。先づ初めに意味を申せば、至心信樂欲生の三心の字訓は、これ〱の字訓である。一字々々の訓を擧げ、而して之れより至心も信樂に入れ、欲生も信樂に入れ、其の信樂は即ち信心故、唯信心の一つと示し下されたのであります。

處て甚だ不要意の事であるも、私も未だよく調べて居りませぬ。存覺上人の『六要鈔』にも次の如く仰せられて、茲の處は書いて置かれぬ。

初めの問答は廣く字訓を擧げて、三心一心の義を成ずることを明す。字訓未だ悉く本文を勘得せず、博覽の宏才仰ぐ可し、信ず可し。

と言ひて、一々の字訓は何處に何うあるのか分らぬ、唯仰ぐ可し信ずべし」と仰せられてあります。處が『御一代問書』には

存覺は大勢至の化身なりと云々。然るに六要抄には、あるは三心の字訓、そのほか勘得せずとあそばし、聖人の宏才仰ぐ可しと候。權化にて候へども、聖人の御作分をかくのごとくあそばし候。誠に聖意はかりがたきむねをあらはし、自力をすて、他方を仰ぐ御本意にも叶ひ候物をや。かやうのことが明譽にて御入候と云々。(三〇六章)

と仰せられて、存覺上人は大勢至菩薩の化身である、三心の

いかんとなれば、至心と言ふは、至は即ち是れ眞なり實なり誠なり。心は即ち是れ種なり實なり。

先づ至心といふは、まことといふ事でありませぬ。此の至心の文字に、斯くは一字々々の訓を擧げさせられてあるのである。此の一字々々が味へばどれ丈け味ひが出て来るか分からぬのである。今私が申すのは、ほんの今氣づかして貰ふた丈けを申すので、其の外に猶ほ無限の味ひがあるのを皆さんに味ひつて頂き度いのであります。先づ『至は即ち是れ眞なり實なり誠なり』——一々には申しませぬも、こは善導大師の至誠心の釋のお言葉を、一邊に茲へ持つてお出でになつたのである。斯る具合に此のあとの分も皆な出て来るのである。善導大師至誠心釋の文といふは

經に云く、一には至誠心、至とは眞なり、誠とは實なり。一切衆生身口意業の所修の解行云云。

『觀經』の至誠心釋の文を、斯く一邊に茲に言ひてお仕舞ひ下されたのであります。其眞といふは、聖人の常のお言葉には、眞の言は偽に對し假に對するなり。(信卷)

又實といふは虚に對する言葉である。即ち「うそでない」といふことである。即ち物の實のあることである。今日ていふ充實などいふ言葉であります。聖人は「眞實明に踏命せよ」の和讃の御左訓には、

シチトイフハカナラズモノ、ミトナルライフナツ。

とあります。即ち眞といふは、我々の作る「かり」「いつはり」のまことでなく、眞の佛の眞の遣る瀬無き御まことを頂きたの故、眞である。又實とは虚で無く、一杯に充ち満ちたるお

字訓分らぬ善は無けれども、分らぬと書いて置かざるは、誠に聖意はかり難き行を現はし、我々凡慮の及ぶ處で無き事をお知らせ下されたのである、と斯く蓮如上人も言ひ置いて下さるのであります。て私共も何處に何の字があるなど、先餘り細かく出所を考へ調べる必要は無いのであります。先輩は之を調べて、或は『廣韻』などの字引より調べ出してある。此の半分は字引より出てあるとの事でありませぬ。斯く先輩は一字々々細かく出所を示されてありますも、今大凡を言ふと、多くは至心信樂欲生の一字々々の訓と、夫れから其の訓より更に訓を出したのと、其の他『樂邦文類』等の釋文より義訓を出したのと、之れ等より出来て居るとの事でありませぬ。處て茲に一つ大に氣を付け無くてはならぬ事がある。夫れは昔より茲は字の訓故、唯單なる字の訓として取扱つて居る。もとより字の訓には違はぬも、こは單なる字の訓にはあらず、一字々々聖人の信仰の結晶なる事に氣をつけ無くてはならぬのである。一字々々の味ひが皆な聖人の佛のお慈悲を心に頂かれたる信念の現はれにて、斯く頂くと最も分りよいのであります。斯く言へばとて今申す如く、聖人は、一字々々皆な確實な據所がありてお示し下されしにて、唯我々は此の一字々々より聖人の頂かれた、お喜びの有様を頂かせて貰へばよいと、思ふのであります。

十四

そこで本文に就いて申すに、  
『私に三心の字訓を闡ふに、三は即ち一なるべし。其の意

慈悲故、實である。又誠といふは、即ち至誠などいふ場合の誠で、まことである。一點の雜り氣無き「まごころ」が誠であります。次に「心は即ち是れ種なり、實なり」——之は『玄義分』に

種と言ふは即ち斯れ心なり。  
とある御文より義訓をお出しなされたと申すので、種といふは即ち物の「實」である、「たね」である。即ち前の實と同じである。従つて次ぎの實なりの訓が出て來つたのである。此の至心の處は、凡て此方の受け心で書かれてあるのであります。

十五

次に。

『信樂と言ふは、信は即ち是れ眞なり、實なり、誠なり、満なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なり。樂は即ち是れ欲なり、願なり、愛なり、悦なり、歡なり、喜なり、賀なり、慶なり。』

茲には大分色々の字訓が擧げさせられてある。此の中茲の處は大部分は明らかに字引に出てある、と申す事でありませぬ。勿論夫れが悉く、後の人の調べたのが、果して聖人のお心に當つて居るか、夫れは分らぬ。先づ初めの「眞なり、實なり、誠なり」は只申した通りにて、次の満といふは、即ち實の義である、物の「から」でなく、一杯に充ち満ちてあるが満であります。次ぎの極なりといふは、極は物の「さまる」のが極である。因明に極成不極成といふ事があつて、物の疑ひなくさ



まるのが極成である。遣る瀬無き佛の親心を承はりて、彌々往生一定と極まるが極であります。又之を速の意味で言ふ時は、聖人の言葉には、

圓頓といふは、圓は圓融圓滿に名け、頓は頓極頓速に名く  
〔愚禿鈔〕

といふ御文もあります。次の成といふは、即ち今の極成の意を成さんが爲めに、誠の字よりお出し下されし訓にて、即ち矢張り疑ひなくさまる意である。我々の心に、如來の廻向貫徹して、彌々「さまる」のである。又用といふは、信の文字から言ふ時は、即ち信用の義である。彌々間違の無いと信用する味ひであります。——最も此等の事は一々斯うて無ければならぬと言ひ難い。聖人の信心を推測して申すのは、誠に勿體無いのでありますけれども、私思はして貰ふに、近頃の文章には能く、「信は何々なり何々なり」と、斯ういふ風にいくつも重ねて書く風がある。故綱島梁川氏などよく斯る書き方をせられた。此の字訓釋の一段は即ち夫れにて、聖人の爲された事には、いつも徹底してなされるもの故、此の調子はづれの事が幾らもある。故に一々之は斯うと極められぬ。唯銘々信の上より存分に喜ばせて貰ふ外無いのであります。さて次ぎの重なりは、敬重、尊重の義である。尊み重んずるのである、謙敬聞奉行であります。審なりといふは、誠の字より出て來る訓であると申す事で、「つまびらか」である。御信心とは、底の底迄審かにお慈悲を頂く事にて、之程審かに行き届いて下さる事は無い。信心はごく大まかなものかと思へば、斯く小さいごく微細なところ迄、審に喜ばせて貰

ふも、又同じく心底よりほほ、笑み喜ぶ事である。佛の大悲を聴聞し、心身悦豫して、恰も心中、花の開くるが如く喜ぶが悦である。又次の歡と喜は言ふ迄も無く信心歡喜の喜びにて聖人を之をお分けなされ、

歡喜といふは歡はみをよろこばしむるなり。喜はこゝろをよろこばしむるなり。〔一念多念證文〕

このお示しもあります。次に「賀なり慶なり」——こは歡喜より出て來る訓にて、矢張りよろこぶ儀である。聖人は又歡喜と慶喜とをお分けなされ、

歡喜とはうべきことをえてむすとさきだちて、かねてよろこぶこゝろなり。慶喜とはうべきことをえてのちによりこぶこゝろなり。〔一念多念證文〕

この御言葉もある。又「和讃」では、

十方諸有の衆生は、阿彌陀至徳の御名をさし、眞實信心いたりなば、おほきに所聞を慶喜せん。

此の慶喜の御左訓に「シンズルゴトヲエテヨロコブナリ」と。即ち聴いた事を有難く喜ぶが慶賀であります。

十六

次は欲生の訓になりて、

『欲生と言ふは、欲は即ち是れ願なり、樂なり、覺なり、知なり。生といふは即ち是れ成なり、作なり、爲なり、興なり。』

欲生と云ふは、極樂に生れ度いと願ふ心であります。其の欲の字に「願なり、樂なり」の訓がある。之は既に申せし通りに

へるのであります。次ぎの驗といふは、「しるし」といふ字である。確な「しるし」ありて、之に違ひ無いと明らむる事である。之なども今日信仰上頻りに實驗々々といふ事を言ふ。之れなども矢張り確に「しるし」ありて、明かに頂ける事と言ふのであります。次ぎに宣といふは、即ち宣布の義である。「のべしく」といふ意味である。信仰といへば六かしきやうなれども、何も六かしい事では無い。佛が廣大のお慈悲を普く宣布し下されてある。夫れを其儘頂いたが即ち信心である。『證卷』の終りには、先程言ふ天親菩薩が一心のお示しを仰せられて、

論主は廣大無碍の一心を宣布して、遍く雜染堪忍の群萌を開化し、宗師は大慈往還の回向を顯示して、慇懃に他利々他の深義を弘宣せり。云々。

といふ言葉もあります。又次ぎに忠なりといふは、即ち忠實の忠である。「まめやか」にして二心なき事である。佛の廣大な慈悲を頂いた信の一念は、「まめやか」にして二心無き味ひであります。

次に信樂の樂字の訓になりて「樂は即ち是れ欲なり、願なり……賀なり慶なり」——樂は即ち歡喜愛樂の意にして、佛の廣大の御まことを頂き、心中に遣る瀬無き大悲が喜ばしく、願はしき有様であります。其の樂は即ち欲なりといふは樂字より出て來る轉訓との事にて、佛の廣大なる本願の本未を承はり、極樂に生れんと願ひ欲する意である。次の願なりといふも同じであります。次に愛といふは、即ち「よみする」である。本願の親心を承はり愛し喜ぶ事である。悦なりとい

して、次に「覺なり、知なり」とある。此の二字覺知と續いて「さとりしる」である。佛のお慈悲にからりと疑ひ無くなりて覺悟のついたが、即ち覺知である。たしか『略文類』の中に、先きの所の御言葉に「愚鈍の衆生解了し易らしめんが爲に」とある御文を、

愚鈍の衆生覺知し易らしめんが爲に云々。とあつたかと記憶します。斯く字訓釋の味ひ、手短かにお話致すのでありますも、こは一々の文字の講釋に非ず、一字々々が信仰の有様故、一字々々が皆な有難いのであります。

次は生字の訓になりて「生といふは即ち是れ成なり作なり爲なり興なり」——茲は昔より説がありて、中々分らぬ處なのである。併し之とて今私の思ふまゝを申して仕舞へば、此の『信卷』の下巻に「是心是佛是心作佛」などのお言葉もあり、私は茲は「即身成佛」是心作佛などの語より仰せられたので無いかと思ふのであります。即ち欲生といへば、廣大なる大悲回向により、成佛して、佛に作る事を願ひ樂む心である。而して其の心は、遣る瀬無き大悲を決定した信の一念に具はるのであります。又次の「爲なり興なり」も又同じく佛に爲され、佛と興る事を喜ぶ意味である。又之を其の願ひ樂む心は、佛の方より信心を起さしめ、然ら爲て下さるといふ上より言ふ時は、佛より興さしめ、爲させて下さるといふ意にもなります。併し茲は然らして下さる佛のお力よりも、其のお力を此方の心に頂いたる味ひの上より、書かれてある事を知らなくてはならぬのである。



字訓の處は以上にてとゞめ、さて次ぎに、  
『明かに知ぬ。至心は即ち是れ眞實誠種の心なるが故に、疑蓋難ること無き也』。

此度びは今迄の字訓を續けて擧げさせられたのであります。之が唯の字訓丈けならば、無理に續けてこじつけたやうになるのであります。先きより言ふ如く、其の字訓の上に御自身御頂きなされたる信心の儘が現はれてある故、皆なすらくと續くのてあります。そこで『至心は即ち是れ眞實誠種の心なるが故に』——即ち上に申すが如く、至心といふは、偽はりて無く、假りて無く、又「から」てなく「うそ」て無く「まこと」にして、「み」のある心が至心である、故に疑蓋といふものは更に難る事が無い。して見れば至心は明らかに大悲の御まことを頂きたる心にして、之に一分一厘疑ひの雜らざるまことの心である事が、明かに知られる、とのお示しであります。猶ほ之からあと、信樂も欲生も皆な眞實の一心である事を顯はす爲め「疑蓋難る事無し」のお言葉で、皆な結ばれてあるのであります。次ぎに信樂に移りて

『信樂は即ち是れ眞實誠満の心なり、極成用重の心なり、審驗宣忠の心なり、欲願愛悦の心なり、歡喜賀慶の心なるが故に、疑蓋難ること無きなり』。

斯く信樂二十字の字訓を五句におまとめなされてある。之が一々皆な有難いのであります。異な事を申すやうなれど、私熟々聖人の事味はせて頂くに、古今を通じ人生を貫いてお出

來るに、何處迄ゆきても要するに一分一厘疑ひの雜らぬ心である。故に信樂も亦結局疑蓋を離へぬ心である。といふのが茲の御示しであります。次ぎに欲生も亦同じく

『欲生は即ち是れ願樂覺知の心なり、成作為興の心なり、大悲回向の心なり。故に疑蓋難ること無きなり』。

願樂覺知といふお言葉が、實に有難いのであります。願樂は即ち佛の廣大なる仰せを承はりて、願ひ樂むことである。又覺知は廣大の仰せを「さとりしる」のである、覺知するのである、信知するのである。故に佛のお慈悲の徹到して下された一念の味ひは、此方の方より「有り難いと思ひました」など、此方より思ひつくなどの事にあらず、其の一念に彌々淨土往生疑ひ無しと、明に目の醒めた如く、覺知させて頂くのであります。次ぎに成作為興の心といふは、即ち成佛し作佛し、爲させて貰ひ、興させて貰ふ事である。而して次ぎの一句「大悲回向の心なり」といふ此の句は、前の字訓の所には無い句である。聖人特に此の句を茲の處に、態々入れてお措きになるのである。而して此の一句あるが爲めに、今の成作為興にしてからが、佛より成佛せしめ作佛せしめ、爲さしめ興さしめ下さるのである事が頂けるのである。斯く此の欲生の處に、大悲回向の一句が入れてある事は、大に氣をつくべき事なのであります。去りながら、今の成作為興にしても、佛より斯く成らしめ、爲さしめ下さる、夫れが此方に頂けたる心持の上よりお示し下されてある事を忘れてはならぬ。さて斯く頂き來る時は、願樂覺知にしても、成作為興にしても、大悲回向にしても、全くお慈悲に疑ひ無くなりし處より現はれ來る

なざる爲めに、實に思ひ切つた事を仰せられてある。茲の「審驗宣忠の心」など、こんな事大慈の心が直き胸に届き、隈無き廣大の恵みなる事、まめやかなる御哀れみなる事が眞に徹到したる味ひて無くては、こんな事言ひ出せぬのであります。さて初めに眞實誠満の心とは、眞實誠は即今申す通りにて「うそ」偽はりてなく、まことなる事である、其まことが入り充ちて満足するが満である。即ちお慈悲が入り満ちて、少しも我が心に不満足の所が無く、お慈悲が胸一杯に溢れて下さる所が、眞實誠満の心であります。して見ればもとより疑ひといふものは一點も雜つて居る心では無いのである。又次の「極成用重の心なり」は、之又先きに言ふ通りにて、極成は彌々お慈悲に疑ひ晴れて、之に間違ひ無いと「さまる」事、用は之を信じて用ぬ、重は之を敬重するのである、して見れば是れ又疑ひといふものは、微塵も雜つて居ぬ心であります。又次ぎに「審驗宣忠の心なり」——審驗は確かな「しるし」ありて、彌々審かに之れときまること、又宣忠はまめやかにして、大慈の心が心の底の底迄、明かに入り充ちて下された處が宣忠である。して見れば之とて、全く疑ひを離れた心であることは申す迄も無いのである。又次は「欲願愛悦の心なり」——佛のお慈悲を願ひ望み、愛し悦ぶことである。此の愛し悦ぶ心は、即ち佛の廣大のお慈悲に疑ひ晴れ、有難やと喜ぶ所より出て來るのである。すればもとより一點疑ひの雜つて居ぬ心であります。又最後に「歡喜賀慶の心なり」——即ち歡び慶ぶ心である。して見れば是又一點疑ひの分子を離へぬ心である事は、言ふを要し無い。さて斯く段々細かく調べ

心である。して見れば、欲生も極まる所は、疑蓋を離れたる所より出て來る味ひに結着するのであります。

十八

さて斯く三心共に疑蓋難ること無き心である。となされて次ぎは之を結びて下さる言葉であります。

『今三心の字訓を按ずるに、眞實の心にして虚假難ること無し、正直の心にして邪偽難ること無し。眞に知んぬ、疑蓋間難すること無きが故に是を信樂と名く。信樂は即ち一心なり。一心即ち是れ眞實の信心なり。是故に論主建めに一心と言へるか。應に知るべし』。

「今三心の字訓を按ずるに」——茲の處に訓の字の御左訓に「オシエコ、ロ」となされてある。今迄字の訓とのみ思ひしにいつの間にか斯く明に教へ心とお示し下されてある。すれば字の訓は訓に違はぬも、其の訓は教訓の訓にして、一字々々に斯く教へ下さる訓である。して見れば一字々々が大悲の遣る瀬無き教へを傳へて下さる訓にして、一字々々が我々に遣る瀬無き心を届けて下さるのであります。聖人の御教化には折り／＼此の風の御示しがあるのであります。例へば茲の御文の畢に在る「論主建めに一心といへるか」の建の字などでも「正信偽」には

建立無上殊勝願。

此の建立の字に聖人は「ハジメナス」と御左訓をなされてある。全體建立の字に「ハジメナス」とあるのが分らぬ。普通ならは建立は「タテル」と讀む可きなのである。然るを聖人は「ハジ



メナス」と示し下されたは、即ち建てるのは今迄無き所に初めて建てるのである。我々の無明の様を哀れみて大悲遣る瀬無く、初めて超世の大願をお起し下されたのである故、其のお心をお知らせ下されたのであると、頂く事でありませう。斯く聖人には時々此の類の御教化がある、て今も『三心の字訓を按ずるに』——斯く一字々々三心の字訓に就き、字の教へ心を頂くに、であります。字の教へ心を頂くとは、即ち斯く一字々々字訓に現はれてある丈の佛のお慈悲を頂くに、である。全體此の字訓といふのが、一々の字で、佛のお慈悲を教へて下さる心故、其の慈悲を頂き源に逆上ると、である。其の逆ると何うか。即ち『眞實の心にして虚假雜ること無し、正直の心にして邪偽雜ること無し』である。即ち上來申述る所の字訓により、思召の程を段々頂き來るに、要する所至心、信樂も欲生も、三心共に疑蓋雜ることなき眞實正直の心であることが分るとの示してあります。眞實の心とは即ち「まこと」の心である。故に「うそ」「かり」の虚假なるものは一分も雜つて居ぬ心である。又正直の心とは、正は「まざしく」直は「すぐ」である。即ち廣大の仰せを承はり唯此のお慈悲一つと、脇目も振らず正直に一心に喜ばせて貰ふ心である。故に邪の「よこしま」「偽の」「いつはり」の心といふものは、微塵も雜つて居ぬ。故に詰まる所、三心共に虚假邪偽雜らざる眞實正直の心に外ならざる事が分るとの示してあります。而して次に『眞に知れぬ。疑蓋間雜すること無きが故に、是を信樂と名く』と。即ち茲が彌々信樂の一つにお收め下さる處である。即ち斯く至心信樂欲生の三心、共に疑ひの無くなつた處

であつて見れば、即ちまこと心一つである。故に之を頂いた處は、一片の疑ひも無くなつた味ひ故、此の三心ありと雖も要する所信樂の信じ喜ぶ一つであるとの示してあります。次に『信樂は即ち一心なり。一心即ち是れ眞實の信心なり』——即ち初めに天親論主が一心と仰せられたとあつた、其の一心は、此の廣大の佛の御まことを信じ喜ぶ此の信樂が一心である。信樂は上來申す如くて、全く佛のお慈悲に疑ひの無くなつた一心故、信樂即ち一心である。其の一心は即ち又眞實の信心である。——之は『曇鸞大師讚』に

論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふ。

即ち佛の廣大の御まことが徹到して下されての一心故、眞實の信心である。『是の故に論主建めに一心と言へるが。應に知るべし』——即ち是の故に天親菩薩が『淨土論』の初めに『世尊我一心に』と御示し下されたものと應に知れど、此の御文を御結び下されたのである。天親菩薩が『淨土論』の初めに、『世尊』と呼びかけ、『我一心に盡十方無碍光如來に歸命す』と宣はせられた、其の『論』の一心は此の信樂の一つ故に、一心と仰せられたものと應に知る可し、とお知らせ下されたのであります。

十九

猶ほ序に、曾て或人が此の「應に知るべし」の御一言を非常に喜ばれた。其の方は尾張の方でありますが、此の「應に知るべし」が實に有難い。當り前に一應言ひ切つて仕舞つた其上

に、斯く「應に知るべし」と重ねて御書き添へ下されてある。

こは「この通りだから斯く味はへよ」と、明かに間違ひ無きお慈悲を相知らせ下さる御言葉である。とて、非常に喜んで話された事があります。其の方は猶ほいくつも此の風の事を教へて下された。第一『御本書』の序文に、「あゝ」といふ御言葉がある。

噫弘誓の強縁は多生にも値ひ難く、眞實の淨信は億劫にも獲がたし。

此の「噫」が有難いと話された。又『歎異鈔』には「其の故は」といふお言葉が澤山ある。之が又非常に有難いと語られた。

たとへば 彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは罪惡深重云云。(第一章)

たとい自然聖人にすかされまゐらせて……後悔すべからずさふらふ。そのゆゑは自餘の行をはげみて云云。(第二章) 善人なをもて往生をとぐ。いはんや惡人をや。……本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは自力作善のひとは云云。(第三章)

(第五章) 親戀は父母の孝養のためとて、……念佛一遍にてもまうしたることいまださふらはず。そのゆゑは一切の有情は云云。

(第六章) 專修念佛のともがら、わが弟子ひとの弟子……親戀は弟子一人もたずさふらふ。そのゆゑは、わがはからひにて云云(第六章) 其のゆゑは、彌陀の光明にてらされまいらするゆゑに云々。

(第十四章)

そのゆゑは善信が信心も聖人の御信心も云々。(結文)

聖人のおほせには善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆゑは如來の御心に云々。(同上)

そのゆゑは念佛まうすについて信心の有無をも云云。(同上) 著しき所になると、皆な之れがある。之れを拜讀すると實に有難いと喜ばれた事があります。私氣がついて見ると至る所に之がある。殊に中には「そのいはれいかにとなれば」などいふ御叮嚀なものもある。之れ皆な遣る瀬無き大悲の廣大にして極まりなき事を、お知らせ下さる事と頂く事でありませう。

(夏季求道會第二日第一席)





## 悪人正機

(求道學會日曜講讀)

近角常觀

大行天皇御崩御後、自分は傳道もせず、之れと際立ちて信仰上感ずこともなく、却つて不法懈怠に、其日々をうとり、と送つて居る事である。兼て此の際を御縁に『涅槃經』を拜讀し、佛入涅槃の當時を忍びつゝ、『御本書』に表はれたる悪人正機の趣き——即ち阿闍世王が御見捨て無き廣大の慈悲にて、安心せられたる事柄を味はんと思ひつゝ、夫も考へのみにて、今にしみじみ、拜見する事も出来ず、過し居る事である。故に、陛下御大喪の折柄、眞に謹慎も出来得ぬ有様に、甚だ申譯なく思ひ居る事でありませぬ。之に就けても人間の當てにならぬことが能く分る。即ち一方に謹慎せんとして閉居すれば懈怠に流れ、さればとて自然に任かすれば、不謹慎に陥る次第なのである。常々我々の爲る事なすことは、皆なこの通りにて、私も深く懺悔させて貰うて居る事でありませぬ。

## 二

さて斯く此の間、讀書するでも無く、さればとて朝夕佛前にて奉悼の勤行する以外には稱名念佛するでも無く、却て平素より懈怠に過しながらも、其の間新聞などで世間の有様を眺め、人の奉悼せらるゝ様子を見、又此の際世間の人々が若

く喜ばせて貰うて居ることである。て今も此の思ひの上より心靜に佛の御本願の「さしめ」の處を共に喜ばせて貰ひ度いと思ふ事でありませぬ。

## 四

さて今日の世間思想界の有様を一言に言ふと、今日の思想界は、一方は「自分の心の思ひ通りに任かす」といふ思想と、一方は「斯くくすべきである」といふ道德的の教えと、此二つに歸着する。人間は善く出来ずとも己を得ぬ」といふ思ひと、「然らば仕てはならぬ、出来てもせぬならぬ」といふ教えと、此の二つである。此の二者の間に狭まつて、皆んなが自分の立場を失ふことになつて居るのである。先づ一々事柄を擧げる迄も無く、今日世間に行はれて居る思想を、心靜かに考へれば分る。現代の社會、たしかに一面には眞地目なる「斯うぢや」「あゝぢや」の教えが行はれて居る一面には、たしかに世の中を馬鹿にした如き氣風が行はれて居り、恰も下駄をはき違えた如き風になつて居るのである。處が之れが世間にあるばかりで無く、私自身矢張り之れになつて居るのである。今言ふ如く、一方に謹慎せんならぬと思ひて、閉居し傳道せず居るかと思ふと、一方には放逸に流れ、うとり、と暮すことにならぬ。之れではならぬ、確つかりやらんならぬ」と思ふと、又一方では何うしても旨く行かぬ。一々事例は擧げぬも、日常我々に起りつゝある事は、皆な之れなのである。一面があれば、又必ず其の裏があり、世の中の事は何でもかでも、皆な之になつて居るのである。之れが何か、本來人間の直覺が此の以外に無い處から、皆な出て來るのである。故

干の御報謝を致さるゝ模様を見るにつけつゝ、まる、陥入りは、御信心を喜ぶ事の外に無いことを、彌々感ずることである。猶ほも少し著しく言へば、今日一般の思想界及び實際世間の有様を見るにつけ、「何うしても之は、佛のお慈悲に安んずる以外に道は無く、又お慈悲に安んじて御報謝致さねば、外に最早や道は無い」と、此の思ひのみは暫も胸に止まず、此の點より言ふ時は、心中此の頃は頗る忙がしく感じて居る事である。今日の時節は、此の佛のお慈悲を頂くにあらずは、他に我々の安んずる道が無い」と、いふ事につき、此の頃はよく、氣づく事でありませぬ。

## 三

さて斯く自分が此の心持なると共に、又近頃は諸方面より訪ねて下さる人々が、或は人生の實際問題につきて質問せられ、或は無常の出來事に遇ひて、聴かれ、言はゞ思想上信仰を問題として、深く考へて居らるゝ人々が、何う言ふ事か近頃は訪ね下さる事が多いのである。言ひ換へると、今茲に何か人生上の出來事がありて、單に信仰上ばかりで無く思想上としても信仰が無ければ行けぬ事を、又世間的實行の上よりしても宗教で無ければ行けぬ事を、深く経験せられた方が、深から、恰も底の底迄叩きて、叩き盡さねば止まぬ如き態度を以て、訪ね下さる事が多いのである。こは丁度私自身が、今言ふ勿體無き事なれども、特に讀書するても無く、又佛前に詣らざるでも無く、不法懈怠の日暮しの中からも、日夜「何うしても御信心で無ければならぬ」と考へて居る、其の問題を、恰も尋ねに來て下さる如く考へ、私も深

に又之を各個人の人生問題にして見ても、皆んなが一面自分の爲め「斯くも有り度い」との思ひが頻りに在る、他の一面には人の爲め「斯くも有れがし」との思ひが又澤山あるのである。而も結局自分も出來ず、人にも出來ず、サア此の兩方の間に立ち、仕て見やう無きぢや、苦んで居るのが、今日世間の有様である。

## 五

そこで今聞く可きは何であるか、といふに即ち阿彌陀佛の御本願である。此頃私は妙なこと言ふやうなるも、今迄最も聞き慣れ、言ひ慣れて居つた御本願を、今更の如く耳新らしく感じさせて貰ふて居る事である。御本願の廣大なる事を感じさせて頂くは、いつもの如くなるも、此の頃は、「彌々も本願で無くては駄目である、何うしても茲に本願の道がある、之を頂かなくては仕様の無い事である」と感ぜさせて貰うて居る事である。

そこで其の本願とは如何なる佛の仰せであるが、如何なる佛の光りであるか。昨日も或る基督教の經驗ある方が、私の『人生と信仰』を讀み、「結局佛を認める一つが肝腎であるが、如何にすれば其の佛を認める事が出来るか」といふ至極眞地目なる立場で、尋ねに來て下された。又先日或る醫學専門の立場で、既に或程度迄は充分此の人生問題を研究して出でになる方が訪ねて下された。免角近頃は既に充分考へて出で難き事であると、私も喜ばせて貰うて居る事である。

## 六



全體「佛に接する」「佛に出遇ふ」「佛の光りに接する」といふ其の最後の處は何處に在るか、といふに外に在るのでは無い。私よりしては、一言に言ふに、何も無いのである。私よりしては、爲す可き事も出来ず、心に斯くあるべきと思ふ事も、實際に然らなれぬ。心に「してならぬ」と思ひつゝも、いつの間にか思ふさま放逸に流れ、右に行けば四角くなり、左に行けば勝手になる。斯く此の何うにも仕て見やう無き、此の淺間しき心の其處に、今佛の本願は來りて下さるのである。實に我々人間は、斯く右すれば右で本當のところに行かず、左すれば左で氣儘になる、今大悲の親心より之を見て、如何にも其の罪深く思ふやうにならぬ——又どの點より眺めても自分の氣儘を言ひ、悪いことの止まぬ、夫れが一入に哀れだと思召し下さるのである。若し外の人なら、「悪い者なら仕方が無い、何れ丈け言ひても死ぬるものは死ぬる」と、すげ無く捨て、仕舞ふ。其の悪い者は捨てられ、病める者は仆る、仕方の無き人生——「負けるのがいやなら一生懸命やれ」との教えは、百言はれても夫れが出来ぬ此の仕やうの無き有様を、佛は茲を覽下され、其の人力に及ばぬ、人間として避く可らざる弱點を持ち、人には此の心を知りて貰へず、如何にも斯くの如く仕方の無いのが、最も哀れむ可きである、人に捨てらるゝのが不便である、死んでゆかんならぬのが可哀想である、生き甲斐無き人生に、生き度い——と藻掻いて居るのが哀れである、と思召し下さるのである。人間は一面極めて消極の者であつて、善く出来ぬものは出来ず、死ぬるものは死んで仕舞ふ。斯く人力の仕て見よう無き消極の人生であ

話致し度いと、思ふことなのである。

## 八

先づ眞地目な方が慈悲を求め、又久しく求めて安心の出来ぬ方が皆な言はるゝには、「何うかして佛を認め度い、何うかして佛のお光明に出遇ひ度い」と、者な此方より佛に向うて居らるゝのである。之れが皆な間違ひなのである。眞地目な方の、多くは此方より佛を求めるとなる故、何うしてもいかぬのである。又眞宗の説教を聞きつけて居らるゝ人は、『御文』を頂くと「阿彌陀佛後生助け給へと頼む」とある、其の頼むは、何うすれば頼まれるのであるか」と、皆な之れである。又人生問題より來る人も、矢つ張り「自分は逆境に居る、困つた、何うかして茲に一つ安心を得度い」と、其の「得度い」が「何うかして今迄の苦痛を去りて、人生的に都合よく成り度い」「信仰を得て心が樂になり度い」と、或は人生的に苦の去らんことを思ひ、或は精神的に苦より脱れんことを思はるのである。斯く色々の場合はあるが、要するに皆な此方より佛に向うて居るのである。近頃接する人々の、殆んど全部は之れであると申してもよいのである。

## 九

處で此の立場では、何時迄やつても頂けぬ。どれ丈け聞いても頂け無い。之れは方角が間違つて居るからなのである。佛のお慈悲は、決して此方より頼むにあらず。或る程蓮如上人は「南無阿彌陀佛と頼む」とも、又「頼むが南無で、助け給ふが阿彌陀佛である」とも仰せられた。勿論之には違はぬも、其の南無と頼むが、行者より出る思ひにあらず、佛の御力を

る。其の消極の人生故に、其の消極の闇みへ一人々々投げ入れられ、闇みより闇みに行く我々である。血の涙流すも、矢張死ぬ時は死ぬる。如何に泣き叫ぶも、闇みに行く事は止められぬ。如何に悶えて見ても、業なれば仕方が無い。消極の方面より言へば、此の通りである。實に斯くの如き業報にまつはられ、斯くの如き人生に在る我々である。其の如何にも力無き、助け無き、善き事の出来ぬ、出来ぬのに仕たがる、助け無きに助けを求め、當てにならざるを當てに仕て居る、其の私の根性を大悲の眼より御覽下され、其者が哀れ可哀想である、其者を見捨てぬ、其者の力となる、其の業が有るので見捨てられぬのである、と此の私の心の底の底迄知り抜き、仰せ下さる之が佛の御本願なのであります。

## 七

私は耻づかしけれど、都合によると妙な事を感じることがある。南無阿彌陀佛々々と何氣無く念佛しつゝ、ふと「成程南無阿彌陀佛である。此の南無阿彌陀佛を南無阿彌陀佛と稱へさせて貰ふの故、成程有難いことである」と、恰も今迄筒子か何かの珠と思ふて居たものが、俄に金剛石であつたと氣がついた如く、「之はしたり／＼南無阿彌陀佛々々と一粒々々づゝに味へて來て、「はて之は今更何を思ふて居たのであつたか、今迄常に言ふて居た事無つたか」と、あとで自から嘲り批評する事がある。斯く申せばとて毎日佛前で稱名するでも無く、うつら／＼と日暮しすることなるも、私はこゝ非常に有難く感ずることである。て何と申さんか上來言ふ如きの遺る瀬無き大悲の味ひを、よく行き渡るやうに

聞かせて頂いた處で、初めて起る思ひなのである。此方より運ぶ思ひでは、どれ丈け運んだとて駄目なのである。

又先日も或る方は、親友の死に遇ひ、心に痛切なる悲哀を抱いて、此の悲哀を以てすれば、必ず光が開けようと言はれた。甚だ畏れ多き事ながら、我々は、陛下の御重恵御崩御に遇ひ奉り、満身の至誠を捧げてかゝつても、唯感激する丈けて、其の以上の事は仕て見やうが無いのである。そんな事では逆もゆかぬのである、そんな事言つて居るのは、まだ我々の眞地目が間に合ふと思ふて居るからである。全くあべこべである。遠慮なく言ふと、其の心は凡夫の偽情である、執着の情に過ぎぬのである。

## 一〇

斯く話しつゝ、思ひ出すと、此頃は此の種の御縁に遇はて貰う事が多かつた。先達でも或る青年文士の方で、廿五になる方が亡くなられ、其の母御なる方に御話した。其の母御なる方は非常に深く悲まれ、子供の菩提を吊ふ爲め髪を下し、「どんな事仕ても、是非小供の處に行かねばならぬ。自分の子供は非常に明敏な子であつた故、屹度次生も相當の所に生れてるであらう、就きては自分も是非菩提の爲め諸の行を修し子供の所に行く氣である」と一生懸命になつて居らるゝ。私は「夫れは執着で無いか、小供に對する執着の情に過ぎぬのでは無いか」とも話して來た事であつた。

皆ながら、「一念の處は何處であるか」「信心を得度い」「人を善く仕度い」乃至「友人を吊ひ度い」「小供を救ひ度い」と、これ皆な凡夫の思ひより佛に向うて居るものであるが、夫れを佛



の方より御覽下さると、夫れが哀れて仕様が無い、皆んなが當てにやらぬを當てにし、出來ぬ事を自分の無力も知らずに仕やうと仕て居る、夫れが皆な哀れて見て居られぬと、茲に於てか大悲の親の方より呼び懸け下されたが佛の御本願なのである。此方の方より涙を注ぐので無い、佛の方が、我々が斯る有様な爲めに、血潮の涙を瀧下され、力の無き者が力が有ると思つて居る、其の汝の有ると思つて居るのが間違ひなるぞ、其の思つて居るが彌々可哀想でならぬのであるぞと、言つて下さるのである。

## 一一

何の點より言つても、大悲の親様は凡ての點を御存知下され、ちつとも御目こぼしが有るといふ事はない。御照覽の廣大の心は、我々の一々の思ひ、皆な見をなはし下されてあるのである。して其の罪深く、頼みの無いのが可哀相であるとの大悲の御本願なのである。或は「本願と言つた丈けては頂けぬ、夫れでは唯佛の御親切、大悲の思はく丈けてある、佛の御同情丈けてある」と思ふ人があるかも知れぬ。私がよく人に話す時、「同情と言はると、如何せん夫れ丈けては、かたつばの感じてある、我々の苦しむのが可哀想との御慈悲は有難いけれど、夫れ丈けてはどうにも仕様が無い」と言はるゝ方がある。其處でも一つ其の同情に伴ふ廣大のお力である。佛は其の廣大の親心より五劫永劫の御苦勞を爲し下され、愚癡なる者は智慧を以て救ひ、惱める者は光を以て照し、必ず其の者を救はねば措かんとの遣る瀬無き大悲の力、積り積り自在神力の佛とは現はれ下されたのである。もう外に何の

力も入らなくなつた處から佛とは現はれ下され、必ず其者に永劫の樂みを得させ、一如法界の都に迄連れ歸らずば、佛とは言はれぬぞと、仰せ下さる廣大の阿彌陀佛なのである。

## 一二

そこで彌々の最後は、私の執着が強きか、佛の願力が強きか、之れである。斯く如何にしても執着止まず、煩惱の深き私を、其の廣大の大悲の高く深きより見て下さる時は、願力無窮にましますば、罪業深重をもからず、佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず。

其の他迄覺悟の悪しき、淺間しき人間を、他迄も見捨て無き大悲の深きを承れば、遂に之れが届い下さる。其の一念にはあゝ今迄餘の事當てに爲て居たは大間違ひであつた、あゝ今迄死んだ子供に、未の未迄連いて行かうなどと、實につまらぬ執着を持つたものであつたと、佛の慈悲に充分腹ふくれて今迄の執着は皆な打捨たり、唯大悲の有難やゝとなる。『改悔文』に

諸の雜行雜修自力の心をふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生、おたすけ候へとのみ申して候。とあるは、即ち茲である。

## 一三

諸の雜行雜修とは、必ずしも藥師如來を頼み、地藏菩薩を祈るばかりで無く、此の世の中に廣大のお光を認めず、人生の事を「あう斯う」と祈るは皆な雜行雜修の現世祈りなのである。餘の諸佛諸神を當てするも雜行雜修、此の世の中に佛を當てにせず、他に向ふ者も雜行雜修なのである。其の「諸の

雜行雜修を振り捨て、」である。此の慈悲を頂く以外は、人間の思ひは皆な雜行雜修故、夫れを皆な振捨てである。其の雜行雜修を持ち居る私が、其の罪惡深重煩惱熾盛を見捨て給はぬ大悲——『改悔文』には

佛かねて煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば云々。此の御まことを聽聞すると、此のまことは、之れ程迄に我が身を知り下さる御まことと有つたかと、

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて——念佛申さんと思ひたつ心のおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。『歎異鈔』

一念思はず南無阿彌陀佛と、念佛申さんと思ひ立つ心の起つた時が、即ち次の「一心阿彌陀如來——頼み申して候」である。茲になると、蓮如上人の『御文』と謂ひ、『改悔文』といひ、實に嚴かなる御教化である。斯く此の大悲の届く一念に佛に向ふた處が、此の「一心——頼みて申して候」の御言葉である。

## 一四

さて此の一念の味ひは、必ずしも時を劃して無ければならぬと言ふてもなく、必ずしも時刻に覺えが無ければならぬと言ふても無い。去りながら、今迄聽聞せる大悲の哀れみは、佛の方より私の心を知り抜き、哀れみ、其の爲め長の御苦勞を経て、他迄捨てさせ給はぬ眞の心と承はり、さては——此の私の悪しきが爲めに、夫程迄に大悲の心を痛め給はりし、其の遣る瀬無き慈悲にてましますかと、初めて私の心に頂いたる一念である。所謂「天地の間五道分明なり恢廓窈窕と

して浩々茫茫たり」此の涯し無き人生に、初めて佛の慈悲を承はり夜の明けたる一念である。之を佛を認めたと謂ひ、光明に接したとも言へよう。如何にも此の仕て見よう無き人生に、眞の遣る瀬無き慈悲を頂きたる一念なれば、『改悔文』では

たのむ一念のとき往生一定御たすけ治定と存じ、である。此の一念の味ひは、之を禪にて乾坤を超越すると言はんか、此の一念に淋しき人生に初めて眞の親に遇ひ、無味の人生に光明の慈懷に入らせて貰ひ、無意味の世の中に、凡夫の口より南無阿彌陀佛々々と稱へさせて貰ひ、右も左も盡十方無碍の光明中に入らせて頂くのである。すると今迄いらざる人生を當てにし、「斯うもあうも」と何にしてたのであるか、當てにならざる世なればこそ、佛は斯くも之を知り抜き、哀れみ下さるのでなかつたかと、今迄いやなりし人生が、いやとも見えず、人を當てにして居たは我が誤りと分り、人が不足とも思へなくなり、今迄思ふやうにせんならぬなど、自分の業の深きをも打忘れて、何思ふて居たのであつたかと、唯我が身の申譯なさを謝り果てる外なくなるのである。

## 一五

さて已上は大分消極的に申した。乍去茲がやゝもすると、一方「人生は駄目である、自分ではいかぬ、人に注文して、はならぬ」と、人生の當てにならぬ方ばかり見て、お慈悲の方は、口で有難いと言ひながら心で有難く無くなつて居る人がある。世の中の當てにならぬのが有難い譯は無い、當てにならぬ人生に、見捨て給はぬお慈悲一つが有難いのである。茲は遠慮なく言はなければならぬのである。殊に佛教には消



極の方面は早くよりある。印度で釋尊の御説法の初めの時から、世の中は當てにならぬ、三界は苦であると、當てにならぬ方は必ずあるのである。

處で今日の思想界は、此の當てにならぬものを、何うかして當てに仕様として居るのである。又當てにならぬを言ふ方は、當てにならぬと捨てやり主義に爲て居るのである。佛教を聞きぞこなうと、やゝもすると此の捨てやり主義になる。そこで熟々考へるに、佛のお慈悲を聴聞し、「悪しくてもよいのである」唯のたゞである「此のまゝの御救ひである」と聞くと、「此の儘でもよいのである」「悪しくてもよいのである」となつて、何うも遣る瀬無き慈悲の方が聞えて下さらぬ。佛のお慈悲は此方の仕て見やう無さを捨て、下さらぬ慈悲故、此方は唯の唯位の事に非ず、善き事と言ひては、爪の垢程も出来ず何うにも斯うにも仕様の無い身なのである。而して其者と言つて下さる佛のお慈悲なれば佛の方よりは唯の唯なるも、此方の思ひは、「唯の唯である」「悪しくてもよいのである」と横着であつてはならぬのである。此の遣る瀬無き慈悲の徹到して下された一念は、「あゝ悪るかつた。淺間しかつた、申譯が無つた」と、此の一念に廣大の佛の大悲があらはれ、今迄無味寂寞なりし人生の光景が一變し、積極も積極も大積極、「南無阿彌陀佛が何より有難い、こは如何なる御恵みか、有難や」と、此のお慈悲一つに満腹し、茲に於てか初めて眞に「厭離穢土欣求淨土」——唯我が身の淺間しさを謝り果てる外無いのであります。(八月十七日)

をつれて鹽原の温泉へ参り、靜かに保養させてくれた事がござりました。其中十五六になりまして、あまりこのかんしやくの悪い事を母や先生からいはれて、自分でもどうかしてなほしたい／＼と氣になつて参りました。其時兄から修養さへすれば、ある程度迄はなほるものと、いひかされましたのが強く身にしみまして、日誌をつけたり、指に糸をまきつけたりなどして、一かど氣をつけてみたりして居りました。が、何のしるしもなく、自分にもがつかりまして、それからは兄のやさしく教へてくれるのも、きびしくしかつてくれるのも、ちつとも前の様にうれしくなくなり、時には折角一家揃つて楽しく遊ぶ時なども、いつ皆んなはなれ／＼になるのかわかりもしないのに、こんなにならぬで何が嬉しいのだらうなどと、すべてのものを悲觀しまして、先生の御教も、友達の親切な言葉も、一向耳に入らず、ひとりさびしい苦しいおもひをして居りました。さうしてどうして自分の心を察してくれる人がないのだらう、あゝつまらない／＼などと、だん／＼さびしくばかりなつて、しまひには一人て靜かな處で、考へこんで居るのが、樂しみになつてまゐりました。そのため遂に神經衰弱にかゝり、大切な卒業試験も空しくやめてしまひ、二月ほどぼんやりとねて居りました。

此間兩親は大さう心配してくれましたが、自分にはそんな事少しも察せずに、たゞ我まゝばかりして、悲しんでわけなく泣いて居りました。

書だとか、つれ／＼草だとか読みはじめましたところが、何となく樂しみになりまして、しまひには先に何かののぞみがありさうで、いつか何かわからしていたゞくときが来るやうで、どこかうれしいおもひがいたし、よほどその悲しさがうすらいで参りました。しかしキリストの教は、何んだか安心が出来ない様で、此時から聖書は全くよみたくなくなり、同時に佛様が何となく尊いやうで、有りがたいやうで、しまひには尼さんにもなりたいやうな心地になつて参りました。そして前には、悲しんで見た月もよいけしきも、こんどはどこかにうれしいやうな氣になり、よい景色など一人て靜かにながめて居りますと、心がす／＼しくなり、實にうれしくひとりてよろこんで居りました。そしてこの味を知らない人は氣の毒だなどと、とんでもない考を起し、まるで自分が佛様の境界にでも居るやうなすました氣になり、淋しい中にも仕合せものだなどと、自分で自分をなぐさめて居りました。今からおもひますと、まるで詩的に空想して居つたとも申すのでございませうか、まことに／＼に勿體ないやうでございませう。かゝる中にもかんしやくや強性は、氣になつて居りました。なほさなければいけないと、おもつて居りました。其後縁あつて筑前の栢埜と申す炭坑に、山住いたす身となりました。この時から始めて眞宗の御教を、おきかせにあづかるやうになりました。また嫁ぎました家も、同じ御宗旨なので、母からもしきりとすゝめられ、御寺へは折々参詣させていたゞいて居りました。

其中明治四十一年に、松島艦の沈没とともに、兄がはかなき

告白

殺されても止められぬ

御念佛

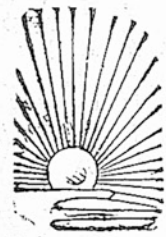
峠しのぶ

この度先生や奥様のおほしめしにて、私の安らかに日暮らしさせていたゞくやうになりしさまを、書かせていたゞいてはと仰せられましたので、この御大切な「求道」に思ふまゝを書かせていたゞくやうになりましたのは、誠に有りがたき仕合と深く先生をはじめ皆様へお禮申上ります。

扱扱は幼き時より御佛縁のうすい家に育ちましたが、兩親や七人の兄弟と共に、まことに賑かな暖かい月日を、過させていたゞいておりました。兩親はキリスト教を信じて居りましたから、常々神様の尊い事や、人間はうそをついてはならない事など、よく云ひかされて居りました。夜分は床について必ず祈をさせられました。かくて私はわけない世間並から云へば、暖い家庭に生立つたので御座いますが、誠に陰氣な性分て神性質で、かんしやくがつよく強性張りて、どうも人のする事を反對にとつては、くやしがつたり、泣いたりして母をいつも／＼困らせて居りました。また成績もいつもわるく、この爲めには姉にすゑぶん心配をかけたました。一時十三の年などはあまり私のかん性が強いために、母はわざ／＼私一人



最後をとげましたので、さあ、いままて考へて居つた事も、おもつた事も何もかも、みんなさえてしまひ、ただ此世があとにならぬ、無常なものだといふ事のみ、つくづく身にしみまして、たゞさびしい／＼おもひに日々泣いて居りました。皆様から親切になくさめて下さる御言葉も、ちつとも自分の心のなくさめにならず、たつた一人ぼつちになつた様なおもひがいたしまして、益々淋しく苦しく、してみよがなくなりました。月日が次第に過ぎますにつれ、いよ／＼自分は御法をうかがはなくてはと、まじめに御さかせにあづかるつもりで居りましたが、いよ／＼うかがはなくてはなどと、大さう力んで居りました。ところが其年の秋十一月、ある知人の所にて、妙好人傳中の馬子の次郎吉様の御話をうかゞつて居りました所が、次郎吉が「自分がたとへころされても、此御念佛はやめられない、あゝありがたい」と、すでに殺されるといふのにもかゝはらず、よろこんで御念佛となへて居つたといふ御はなしを伺ふなり、いつしか一時に胸がはれたやうな心地になりました。何ともかとも申されな感がいなし、たゞもう御やるせない如來様の御慈悲とは、あゝさうまで私を思召し遊ばしてゐて下さるのか、やうも／＼も、いま／＼で御まちながら、御氣ながく御まちながれ下されし事よと、親様の御念力にて、はじめにかゝる廣大な御慈悲に氣づかしていたゞくなり、とうとう我身のおさまし悪るさが知らせていたゞけたやうで、たゞ／＼有りがたいやら、うれしいやら、勿體ないやらと思ひが細々出て二三時間はもう頭もあがらず、おもふぞんぶんなかせていたゞきました。あゝ極重悪人とは私



南無阿彌陀佛

の事でございます。私は此時から自分がい／＼とおもつて、人が悪い／＼とおもつて居つた事が、あべこべであつたと御さかせにあづかりました仕合せに、心が安らかつて、何も申上られない、うれしい楽しい月日をすごさしていただゞくやうになりました。その後は妹もふしぎの御引合にて、近角先生の御許に度々御法話を御さかせにあづかり、悦ばしていただゞくやうになりましたので、求道を毎月送つていただゞき、また此年秋先生が九州へ御下向遊ばされし折、ふしぎの御縁にて御引合にあづかり、其折私がつね／＼よろこばしていただゞいて居る心地を御たづね下さいまして、おもふまゝを御はなしさせていただゞきまして以來、いよ／＼御導きにあづかり、殊にはまたこの度上京いたし、かね／＼慕はしく思つて居りました先生に御法話を、直々に御さかせにあづかり、皆様にも御引合にあづかり、まことに／＼に我身の仕合せ益々悦ばしていただゞく次第でございます。かくしていろ／＼に御導きにあづかりますのも、たゞ事とはおもはれず、たゞ／＼佛智の御不思議を仰ぎ奉るより他は御座いませぬ。なが／＼とか、せていただゞきまして誠に勿體ないやうで御座います。おありがたうございす。

雜錄

○慧信尼公の夢想ありし佐貫の郷を訪ふの記

近角常観

口傳鈔に曰く、聖人本地観音の事。下野國さぬきといふところにて、惠信の御房の御夢想にいはいく、堂供養すとほほしきところあり、試樂ゆしく嚴重にとりおこなへるみきりなり、こゝに虚空に神社の鳥居のやうなるすかたにて、木をよこたへたり、それに繪像の本尊二鋪かゝり云云。常に此夢想を拜する毎に、さぬきとは何如なる處なるかを知らんとする心切なりき。而して未ださぬきの方位をさへきゝたることもなし。地圖を案じて、鬼怒川の畔茫漠不明の處に、佐貫と稱する小部落を發見せり、それさへ地圖によりては脱漏せり、東京附近に佐貫と稱する處あるも、茨城縣なれば、下野國とあるを見れば、先づ鬼怒川畔と判斷するの外なかるべし。然れども未だ參詣の機会なかりしなり。大正元年秋、下野國芳賀郡文谷光賢寺、宗祖六百五十年忌を修行せんとし、祖徳奉讃の講話を開かんとして招待せらる。幸に恰も當時閑あるを以て、之を誦し、或は此機会に佐貫を探らんことを欲し、之を光賢寺に質す。期日至りて返事來らず、少しく訝る所なきにあらざるも、ともかく出立す。實に十一月五日也。汽車上野を發して、再び光賢寺の書を檢す、返事の來らざるも其理あり、此の申込は實に十二月五日なり。乃ち順に一決して、先づ宇都宮に乘懸ぎて片岡佐貫の郷を探るに専らにせんとす。一昨年春、如信上人の墓に詣て、且つ宗祖の當時、下野路此處より乗車せしことを想起して、

原は、師弟弘教の足跡印せざる所なかりしを懐ふ。忽にしてならざらん、乃ち下野國さぬきといふところにて、惠信の御房の御夢想にいはいく、堂供養すとほほしきところあり、試樂ゆしく嚴重にとりおこなへるみきりなり、こゝに虚空に神社の鳥居のやうなるすかたにて、木をよこたへたり、それに繪像の本尊二鋪かゝり云云。常に此夢想を拜する毎に、さぬきとは何如なる處なるかを知らんとする心切なりき。而して未ださぬきの方位をさへきゝたることもなし。地圖を案じて、鬼怒川の畔茫漠不明の處に、佐貫と稱する小部落を發見せり、それさへ地圖によりては脱漏せり、東京附近に佐貫と稱する處あるも、茨城縣なれば、下野國とあるを見れば、先づ鬼怒川畔と判斷するの外なかるべし。然れども未だ參詣の機会なかりしなり。大正元年秋、下野國芳賀郡文谷光賢寺、宗祖六百五十年忌を修行せんとし、祖徳奉讃の講話を開かんとして招待せらる。幸に恰も當時閑あるを以て、之を誦し、或は此機会に佐貫を探らんことを欲し、之を光賢寺に質す。期日至りて返事來らず、少しく訝る所なきにあらざるも、ともかく出立す。實に十一月五日也。汽車上野を發して、再び光賢寺の書を檢す、返事の來らざるも其理あり、此の申込は實に十二月五日なり。乃ち順に一決して、先づ宇都宮に乘懸ぎて片岡佐貫の郷を探るに専らにせんとす。一昨年春、如信上人の墓に詣て、且つ宗祖の當時、下野路此處より乗車せしことを想起して、







# 求道會館建築寄

## 附金第五回報告

(七月末ヨリ十月末ニ至ル)

一金壹百圓也 府下澤柳政太郎殿  
 一金壹百圓也 芝大崎林吉殿  
 一金壹百圓也 麴町高島屋飯田合名會社殿  
 一金壹百圓也 芝岡田治衛武殿  
 一金壹百圓也 日本橋外山彌助殿  
 一金五拾圓也 麴町村井孝子殿  
 一金參拾圓也 布哇村井うの子殿  
 一金貳拾圓也 兵庫是利說爾殿  
 一金貳拾圓也 巢鴨冲鹽ふて子殿  
 一金貳拾圓也 三重無卓一殿  
 一金拾圓也 岩手宮澤善治殿  
 一金拾圓也 本郷今井せい子殿  
 一金拾圓也 日本橋小林ちか子殿  
 一金拾圓也 本郷丸茂ふみ子殿  
 一金拾圓也 芝樺島章子殿

一金拾圓也 山口宇野政輔殿  
 一金拾圓也(第二回) 近江鈴木忠右門殿  
 一金五圓也 德島小室直幸殿  
 一金五圓也 紀伊川端るい子殿  
 一金五圓也 麴町大地原誠言殿  
 一金五圓也 小石川跡見花蹊殿  
 一金五圓也 熊本吉岡民太郎殿  
 一金五圓也 同西行徳量殿  
 一金五圓也(第二回) 下谷山名龍宣殿  
 熊本吉村和七殿  
 北見小山圓慶殿  
 福岡峠しのぶ子殿  
 長野黒澤ひさ子殿  
 芝河野せき子殿  
 日本橋久野るく子殿  
 熊本高濱徳次殿  
 芝田卷しげ子殿  
 本郷矢島ます子殿  
 京橋大隅やす子殿  
 本所霜鳥節子殿

一金參圓也 京橋井上さか子殿  
 一金貳圓也 麻布野上りの子殿  
 一金貳圓也 京橋佐藤與惣吉殿  
 一金貳圓也 小石川木場了本殿  
 新潟大谷女人講殿  
 麴町石山須磨子殿  
 香川溝内藤三郎殿  
 淺草豊岡きよ子殿  
 山形小田切もと子殿  
 芝山田善太郎殿  
 近江木津龍城殿  
 横須賀瓜生さかえ子殿  
 下谷竹島寛殿  
 府下中村ちづ子殿  
 愛知山田増太郎殿  
 本郷三須善太郎殿  
 山口津山ます子殿  
 赤阪堀勇吉殿  
 本所伊藤よし子殿  
 淺草岩瀬静子殿  
 同内藤登岐子殿

一金壹圓也 同倉持せい子殿  
 一金壹圓也 熊本富田眞一殿  
 同徳弘春美殿  
 同石坂眞一殿  
 姫路近藤最證殿  
 大阪爲貴七覺殿  
 越後石塚祐清殿  
 德島中川鶴吉殿  
 熊本石見傳殿  
 同濱田辰次郎殿  
 同渡邊金太郎殿  
 高知長岡秀榮殿  
 愛知柏尾輝喜殿  
 廣島無名氏殿  
 鹿兒島崎野正兵衛殿  
 長野寺田五三子殿  
 淺草杉崎はる子殿  
 京橋加藤すみ子殿  
 同中村きく子殿  
 同田鳥きん子殿  
 日本橋星野りを子殿



- 一金壹圓也 山口坂井瀧三郎殿
- 一金壹圓也 同 小野島覺哲殿
- 一金壹圓也 愛知海老原靜然殿
- 一金五十錢也 大阪福島政次郎殿
- 一金五十錢也 大阪佐藤りく子殿
- 一金五十錢也 熊本龜谷勝順殿
- 一金四十錢也 山口坂井内室殿
- 一金四十錢也 香川瀨富福覺殿
- 一金四十錢也 筑後無名氏殿
- 一金三十七錢也 長崎高松恒作殿
- 一金三十錢也 山口田村みつ子殿

小計金八百八拾貳圓  
四拾七錢也

累計金壹萬參百四拾  
六圓七拾七錢也

右之通りニ候也

大正元年拾壹月拾七日

世話人總人 長尾 收一  
會計監督 西澤 善七  
右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存  
候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

會館喜捨金寄附御注意

- 一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必ず御記入願上候
- 二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候
- 三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

▲名將勇士の美談佳話二百則を收む▼

本書は和漢古今の史實に精通せる足立栗園先生が群籍涉獵の際、戰國時代を主として、江戸幕府隆盛期に及ぶまでの名將偉人勇士の美談佳話二百五十有項を摘抄し、之を得意の流暢平明の筆に上されたるものにして、偉人傑士の一言一行躍如として紙上に現はれ古武士の風格面貌に接するの想ひをなすのみならず無限の感興油然として溢れ來り、一讀卷を措く能はざらしむ。

無珍  
二の本



ポケット形製本  
美麗クロース製  
美本三百頁餘  
本文總振假名付  
正價金五十錢  
送料金四錢

◀ 文序下閣倫賴川德爵侯 ▶

◀ 述編生先園栗立足 ▶

苟くも修養に志し、品性を養はんとする人に對して今古の模範たるや謂ふ迄もなし。而して學校、家庭の修養好材料として恐らく本書の右に出づるものなかるべし。今や世人武士道を思ふの念切なり。本書は將に時代の要求に應じて生れたる仰渴の紀念出版として、將た修養の最資料として切に諸君の机上に一本を薦む。

▲眞に精神修養上唯一無二の珍書也▼

發行所 東京淺草區橋場三百三十一番 發行所 東京淺草區橋場三百三十一番  
發行所 東京淺草區橋場三百三十一番 發行所 東京淺草區橋場三百三十一番  
發行所 東京淺草區橋場三百三十一番 發行所 東京淺草區橋場三百三十一番



言々句句血を以て書ける必讀活文字

見よ！現代に最も穩健切實なる主張を提げて信仰の大光明を放つ思想界唯一の福音！神佛耶三教各派の情勢は内外に亙り細大を漏さず滿載せる宗教界唯一の報告者！更らに大日本宗教協會の設立は大正劈頭の活事業！

# 宗教の日本

大好評 第二號 內容 十一月一日發行

- 本邦宗教各派全國分布一覽 (協會調査)
- 予の歐洲宗教現狀視察記 (中川學博士)
- 世界的大勢と我宗教の將來 (尾崎正治)
- 政教分離の本義 (尾崎正治)
- 禪で鍛つた人物の特色 (河野廣中)
- 蓮如上人の北陸に於ける遺德 (南條文雄)
- 氏神氏子の新研究 (上野五郎)
- ブリス大將の慈父的大家格 (山崎大佐)
- 浪華節に引用する佛敎語 (桃右衛門)
- ▼神道各敎の大綱
- 大社敎 實行敎 神習敎 御嶽敎 神理敎 禊敎 天理敎 修正派

- ▼神の實體 (今井、松村、石川、内ヶ崎、福田、千葉、赤司、曙子の信仰告白)
- 東本願寺の財政現狀 (協會調査)
- 滿堂聽衆殺活自在の秘決 (三遊亭)
- 徒手空掌苦闘傳道美談 (天理敎)
- 行脚修業入禪苦心の回顧 (中川ヨシ)
- 絶體絶命球數を切りし煩悶回顧 (高津栢樹)
- 北海道無言の行者の生治狀態 (生科天野)
- 御加持の靈驗と方法 (岡田久雄)
- 宗教大學案内 (長石川)
- 丑の時參り懺悔錄 (其他材料如山趣味と實查全誌に横溢)

發行所 東京澁田町八木 大日本宗教協會 振替口座東京 九〇二番

本派本願寺大谷尊由御連枝題辭 勸學赤松連城師跋文 內務次官床次竹二郎氏序文 平原唯順編

## 廣村の自治と宗教

內務次官序文一節に「廣村に於ける宗教は活きて働けるなり、世の宗教家及地方改良に志ある先覺者は能く本書を翫味せば得る處多からん」と 赤松勸學曰く「藝の廣村の如き即ち模範の一に居る。而して細かに其出る所を視れば、即ち宗教に根す(乃至)讀む者能く其意を體して、以て之を其地に試みば豈た一村一郷のみならずや、天下の治も猶之を掌に視るが如くならん」と 本書は廣村の自治發展が、云何に宗教感化に起因するか、云何に進捗しつゝあるかの事實のまゝを記述し、毎歲他府縣より踵を接して來訪の視察諸士、並に天下同好諸賢の參考に供す。

産業と佛敎 富國の礎 金五拾五錢 郵税八錢

國民性 二諦の發揚 金五拾五錢 郵税八錢

近角常觀著

## 人生と信仰

- 第一章 人生問題と信仰
- 第二章 悲觀思想と信仰
- 第三章 倫理力行と信仰
- 第四章 犯罪心理と信仰
- 第五章 社會問題と信仰
- 第六章 國家秩序と信仰
- 第七章 世界宇宙と信仰

京御前 都通 油上 路ル 興教書院 振替 一八〇番 大阪 五

申込所

東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六六九六番

求道發行所







前號要目

求道

◎明治天皇陛下奉悼

◎恩赦救恤の詔書

◎感恩の栞

◎明治天皇奉悼會

奉悼會講話

同信仰談話會

講話

◎『教行信證』信卷三信釋

第一席

近角常觀

告白

◎我を知るものは唯此の御一人なり

寺田榮之丞